



多治見商

物語





多治見商
人
物語

明治維新の改革の波でやきものの生産・販売はこれまで制限を加えていた窯株・蔵元制度が廃止された。

自由な営業ができるようになつた多治見商人たちは陶磁器の重い見本カバンを持つて北海道から九州まで

「美濃焼」を日本全国に行き渡せていった。

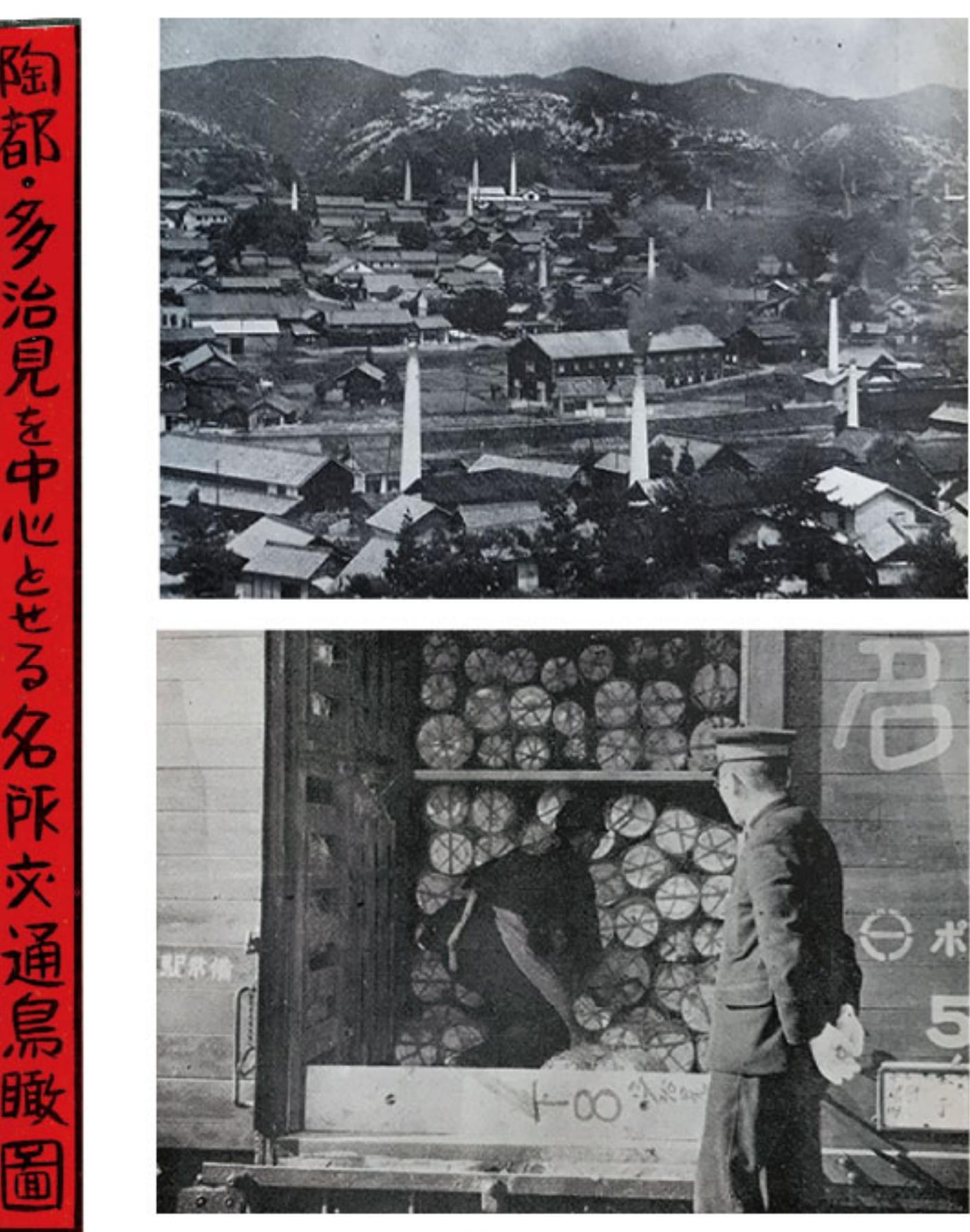
怒涛の如く陶磁器を広める商人たちは地方ごと、時代ごとのニーズを捉み成型・加飾・釉・窯・の職人、それぞれの専門職人と語り合い、

品質を高め、コストの調整を図るなど

クリエイターとしての重要な業績も残したのだ。

国内だけではなく世界の市場とも進出を始めたのは交通網の発達に伴つて、活発になってゆく。最も近い年の中、西港まで鉄道で運べるようになったのが明治線の全通したことむ・駅まで馬車に荷を積んで運び貨車に載せ、名古屋・琵琶湖へ。そこから臨海線を通つた。





陶器を貸車に積む

陶都・多治見を中心とせる名所文通鳥瞰圖

最盛期・前夜

陶都の陶器商人伝

国内・海外へ進出していた多治見商人たち。昭和44年(1952)迄の商業解説と市民の唄を紹介する

市の労働人口の約半数は陶磁器の製造加工業にたづさわり、商業も貿易商卸売商等陶磁器の関係者がいての大半も占める状況で市民の経済的基盤は全く陶磁器にある…

♪ 多治見小唄



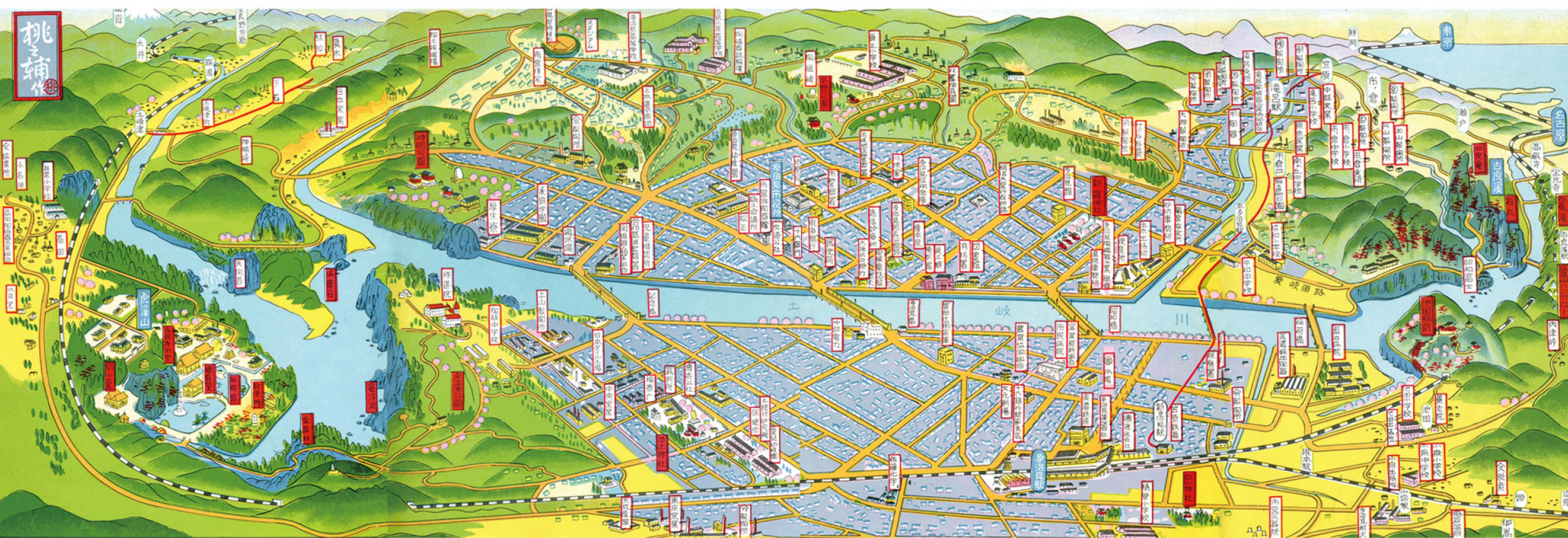
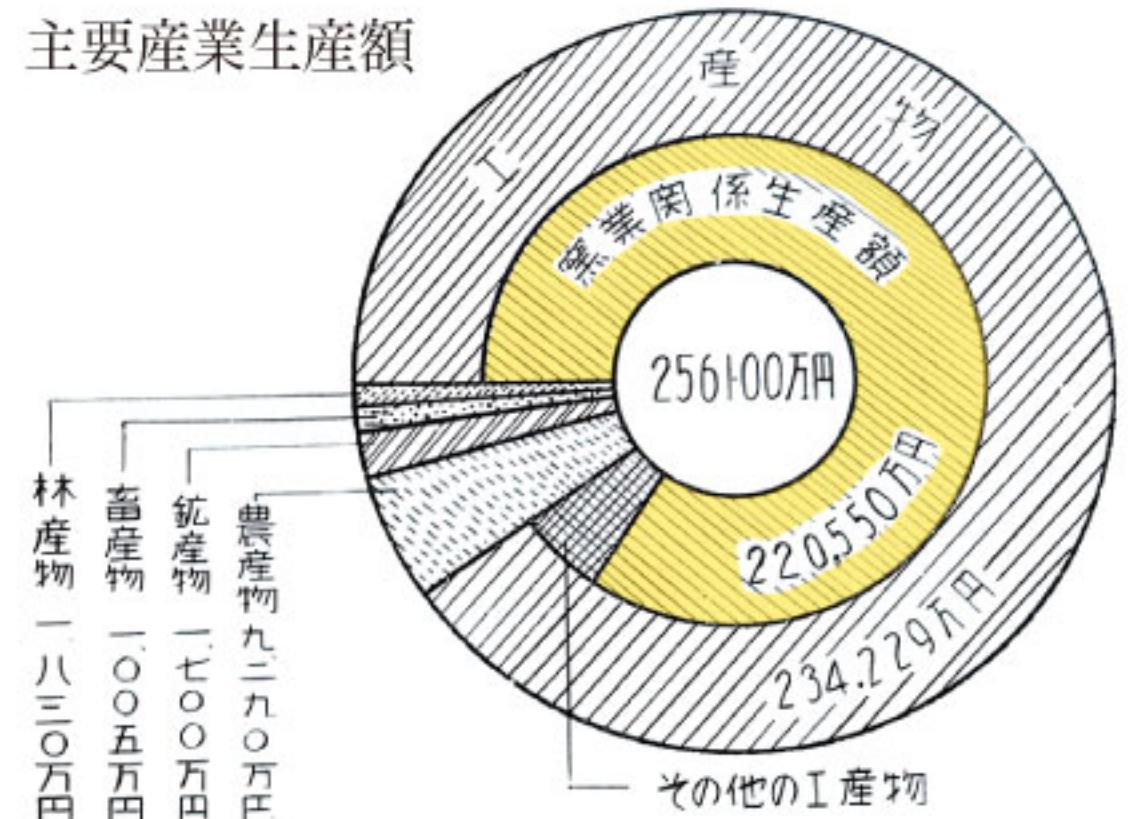
一、ハアー

旅は双六名古屋を発つて
美濃路うれしや上がりは
多治見

ここは釜処お山の土が
燃えて黄金の雨となる
燃えて黄金の雨となる

三、ハアー

モロの中から小唄が洩れる
小唄うれしや声なつかしや
つる思いをそのまま載せて
船に積み出す多治見焼
船につみ出す多治見焼



幕末・明治からの多治見商人

- A 高木 典利
- B 立花 昭
- C 岩井 美和(多治見市図書館郷土資料室)
- D 春日美海(多治見市文化財保護センター)
- E 原 久仁子(多治見市美濃焼ミュージアム)



多治見市の発展に貢献し美濃焼を日本の産地へと育てた多治見商人（陶器商）が、幕末から明治・大正・昭和の激動の時代に美濃焼を全国に販売した活動を、「商いの文化」として捉え、「組合だより」につき年間掲載しました。平成25年(2013)～平成27年(2015)5名の執筆者によりつて、時代を追しながら連載。今後は新しい資料が発見され追補・是正することもあることを「承ください」。

自由販売を求めて

「陶磁器を自らの意志により販売する」

平成の世なら一般的な考え方です、ところが信じられないかもしませんが、陶磁器を自由に販売することが出来なかつた時代があつたのです。江戸時代の美濃（五ヶ村）で、作られた陶磁器は、尾州藩の支配により、尾張蔵元より販売することとなつていきました。そのため美濃の人は、自由に販売することは許されていませんでした。そのままで破り販売したのなら、荷物は没収となり罰を受けることになりました。しかし、幕末になると諸外国の船が来日したことにより異文化の存在に気づき始め、やがて国内の鎖国による規制社会に矛盾を感じる人達が現れるようになつてきました。

そのような状況下、多治見町の西浦円治、加藤助四郎の二名は、それぞれ市場を求め行動を起こしました。助四郎と円治の販売開拓について記した文献がありますので紹介します。

「この地方は天領にして、製品は尾州藩産物と定まり、箱根以東と江州以西の販路は、名古屋蔵元十五名の陶商に特許され、もし此の禁を犯すものは、荷物を没収せられ罰せられるにより、陶家みな蔵元に出荷し、名古屋相場にて勘定をうける。」

「新製品(磁器)盛んなるにつき、多治見村西浦(地名)の加藤五

郎兵衛(後の西浦円治)は、自ら之を売り出し、名古屋蔵元より告訴される、西濃の笠松陣屋にて数回訴訟がある、そのため後に、交渉して円治は名古屋蔵元の一員となり…」

「この業の自由を命として、東西の両都に往復十数回、二十四歳の時同志と、京都村雲御所その御用を受ける、一年後同志と江戸御葉園内陶器所の御用を受ける、この時御葉園役所より「丸ス」の焼印を下付せらる」

「慶應元年に至り、御葉園世話係の取立てにより、江戸幕府本丸御用となる」

「御用品の資格は、運送にても勢力著しく、尾州藩御用品を見下すほどなりし」

このように円治は、名古屋蔵元の資格を取ることにより美濃焼物取締役となり、美濃で生産される新製品の大半を取り扱うことになりました。そして直接江戸などへ荷物を送り、商いを開始しました。

また、助四郎も、自由販売にむけて動き出したのです。江戸時代の中期ならばこのような行動をすれば重罪であつたでしょうが、幕末に西浦円治や加藤助四郎のように新しい考えが生まれてきたのは、政治の動きでも明らかのように、鎖国による規制社会への反動のようと思えます。

やがて、明治維新になると社会の仕組みが一変したことにより規制が無くなり、多治見商人が続々と誕生し、日本全国へ美濃焼を販売したのです。その当時の美濃焼は、国内向けの生活の器を主力品として製造していたため、売れ行きも良く、またたく間に全国有数の陶磁器生産地となつたのです。

多治見市内には、当時の繁栄の面影を残す建物などが今も見られます。



平野公園、金刀比羅神社

助四郎は、多治見市内の新羅神社・金刀比羅神社・永明寺(市之倉町)・八幡神社(市之倉町)などに献納している。

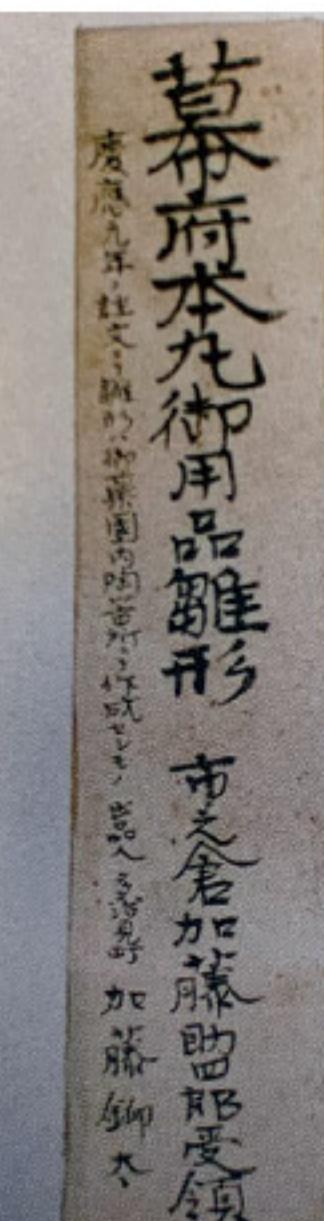
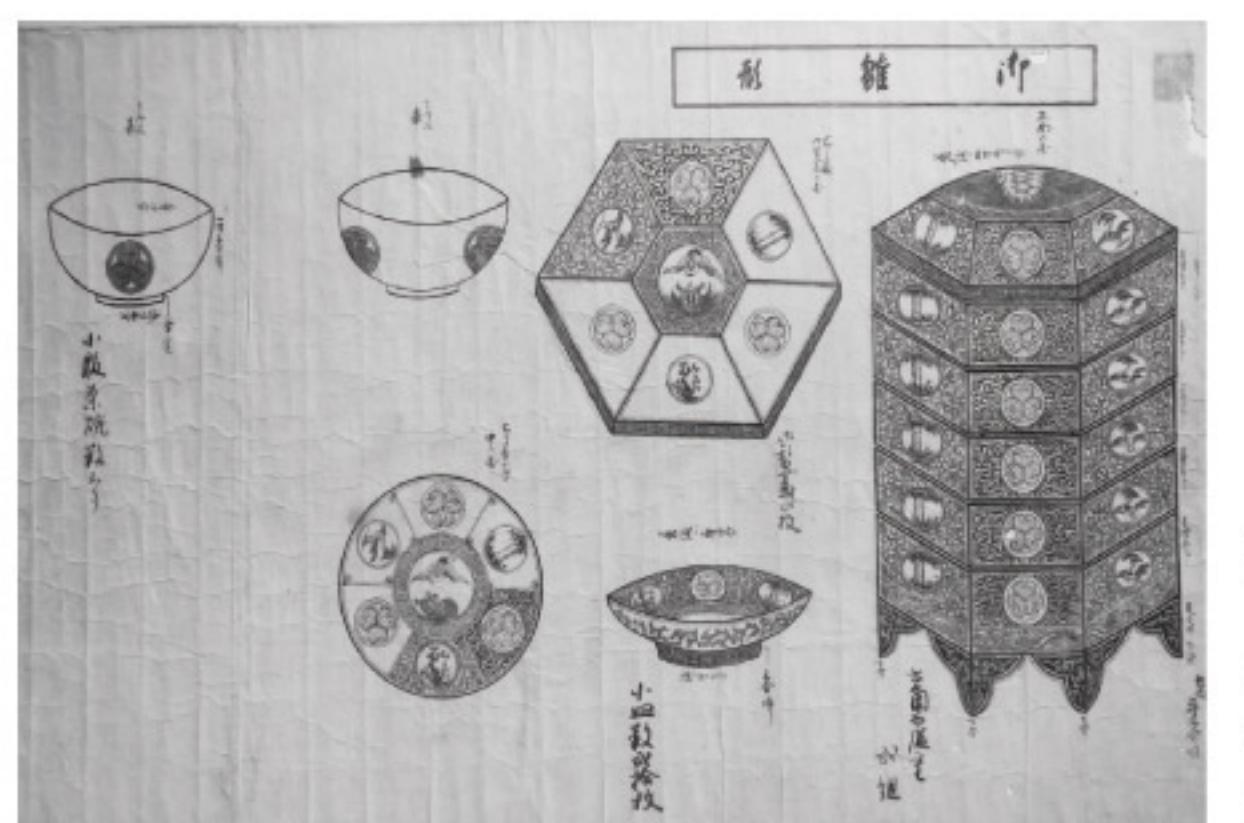
加藤助四郎

(1828~?)

文政10年(1828)に、市之倉村の陶家に生まれ、若くして陶磁器の販売に携わり御用品を納める役を受ける。明治維新後は多治見町本町に店を構える。助四郎は神仏への信仰心が厚く寺社などに献納を多くしている。また子息の助三郎は、明治時代に日本の陶業界に尽くしたことで知られている。

御用品雛形

助四郎が、江戸幕府から授けられたもので、松竹梅に鶴亀の縁起の良い模様と葵の紋が描かれ、当時の美濃焼の技術の高さが伺い知ることが出来る。



西浦屋の中央市場進出

西浦家の祖、加藤助兵衛は尾張国岩作村（現愛知県長久手市）の出身で、多治見村に移住し鍛冶を生業としていました。加藤家から分かれた西浦家初代治助は多治見村の庄屋を務め、新羅神社修復の棟札にもその名前をみることができます。二代から五代まで円治を襲名して、代々村役を歴任しました。

円治(二代)自由化を求める

文政3年（1820）、二代円治の代に近隣窯元への割木販売をはじめ、その後美濃焼の仲買をするようになったことで西浦家と焼物との関係がはじまりました。その当時の美濃焼販売は尾張藩蔵元の統制下にあり、美濃の商工にとって不利なものでした。二代円治は、販売自由化を求めて江戸に水揚（みずあげ）会所（江戸へ直送した焼物を保管する事務所兼倉庫）を設立する運動を2年もの間おこないましたが、名古屋・江戸問屋・尾張藩の反対のため実現しませんでした。

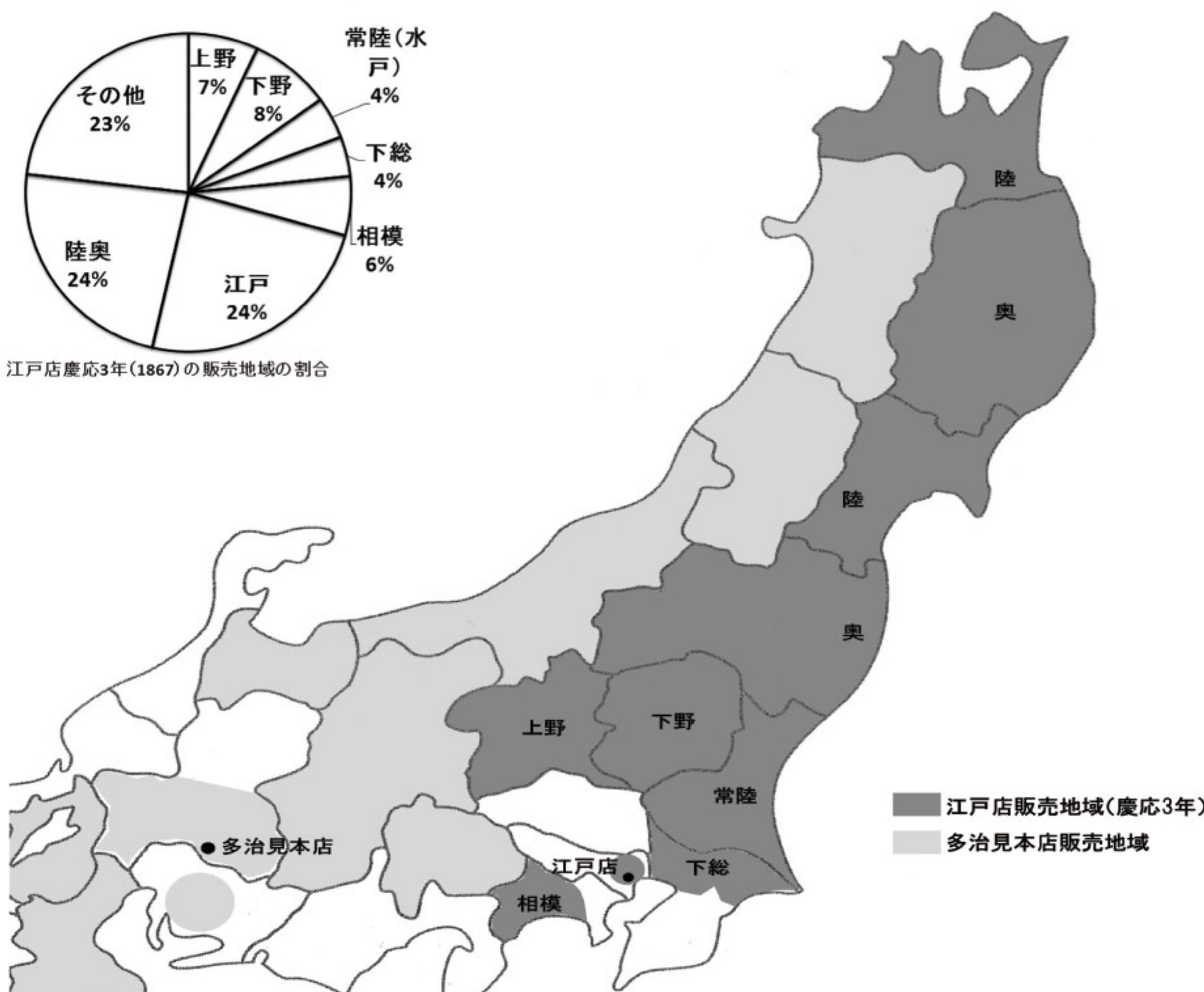
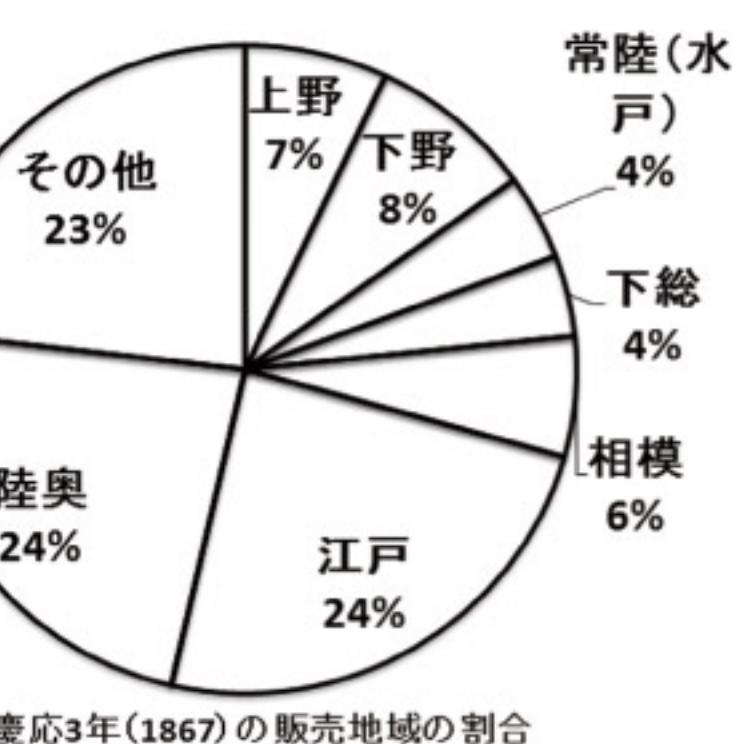
しかしこれに屈せず天保6年（1835）多治見村に「美濃焼物取締所」を設立し、美濃焼の販売窓口を一本化し、販売ルートを組織化しました。これにより製品価格を安定させ、円滑に荷代金回収ができるようになりました。取締役には二代円治が就任しましたが、この時二代の下で水揚会所設立運動や美濃焼物取締所開設に東奔西走したのが当時まだ20代であった後の三代円治でした。三代円治は、二代円治の実子を差し置いて家を継がせるほどの秀才で、面識のない大坂商人に「美濃・尾張のやり人と聞きおよぶ」と言わしめたほどの人物でした。

二十代から活躍円治(二代)

三代円治は天保元年（1830）25歳の時に初めて江戸へ美濃焼を販売し、その後江戸・大坂に出店しました。時代は天保の改革によって株仲間が解散し、都市特権商人の販売独占が揺らいだ時期で、まさに地方商人にとって中央市場進出の好機でした。

弘化3年（1846）に大坂西横堀町（現大阪市）に大坂店を、翌年には江戸店を堀留1丁目（現日本橋本町）に開店しました。店は間口2間半（約4.5m）、奥行五間半（約10m）で、江戸に数ある小規模店の一つでした。店は支配人吉兵衛と付添い人・奉公人あわせて7名で切り盛りしていました。主な仕入商品は美濃焼、ついで瀬戸物、京焼、信楽焼でしたが、当時「本場物」と呼ばれた有田焼を中心とする九州磁器も安政6年（1859）より仕入れています。

江戸店の売り先は江戸のほか相模（神奈川）、下総（千葉）、常陸（茨城）、上野（群馬）、下野（栃木）、陸奥（福島・宮城・岩手・青森）で、特に陸奥は維新期に売り上げが伸び、売り上げの約25%を占める程になりました。



西浦店の多角的経営

西浦店では焼物や焼物原料の他にも、様々な商品を扱っていました。岐阜加納の産物であった釜を仕入れて江戸へ販売したり、米穀・溜り・味噌・塩・反物など日常必需品を近在の窯屋に直売していました。この他にも、地域の養蚕業の取りまとめ役をするなど多角的な経営に着手して、新興の特権商人として商品流通の基盤を強化していました。



西浦円治(三代)

(1806~1884)

西浦家は代々多治見村の庄屋。江戸時代の窯株・蔵元制度から離れようと却走。維新後に自由化され、自ら生産・海外進出も図った。名工・加藤五輔を見出し重用した。

西浦円治(三代)の日記より

「加藤五郎兵衛一代日記」はの日記で、文化3年(1806)の出生から嘉永5年(1852)までの40数年間の主な出来事が、年ごとに書き記されています。家族の出生・死亡・婚姻など私的な出来事の他に、大災害や飢饉、世間の流行なども書かれており、当時の多治見の様相を知ることのできる唯一の歴史資料です。特に西浦店の商いに関する記録が多く見られ、三代円治が東奔西走する様子がわかります。

転機となつた弘化二年の難事

(1846)

壹 大坂問屋の荷代金大滞納

五郎兵衛日記の中でもっとも頁をさいて記録されているのが、大坂に西浦店を出店した弘化3年(1846)の出来事です。この年の日記は、美濃焼物の支払い催促のため1月2日に使いの者を大坂へ遣わしたことから始まっています。大坂の問屋・大和屋利八郎が円治や多治見の他の商人への1530両もの支払いをせずに、妻子を連れて行方知れずになつたため、円治もあわてて大坂へ行き、使いの者と共に讃岐(現香川県)の金比羅様まで利八郎搜索の旅へ出かけました。結局利八郎は見つからず、多治見へ戻つたのは約2カ月後の3月1日でした。大坂逗留中、円治は利八郎が残した美濃焼物を市で販売しながら奉行所へ訴訟し、そんな中でも大坂店の準備を整え、この年西浦大坂店を開店しました。

式 江戸大火

大坂滞在中の1月から3月にかけて、3度江戸で大火事があり、得意先の問屋20軒余りが被害にありました。この火事で無事だった得意先は2軒のみで、江戸での販売が中心であった円治はじめ美濃の商人・窯元も損害が大きかつたことが想像できます。

円治が特に懇意にしていた得意先の近江屋喜兵衛の店も、この大火事で全焼し経営不振となつていきました。このため円治が店を譲り受け、翌弘化4年に西浦江戸店を開店しました。

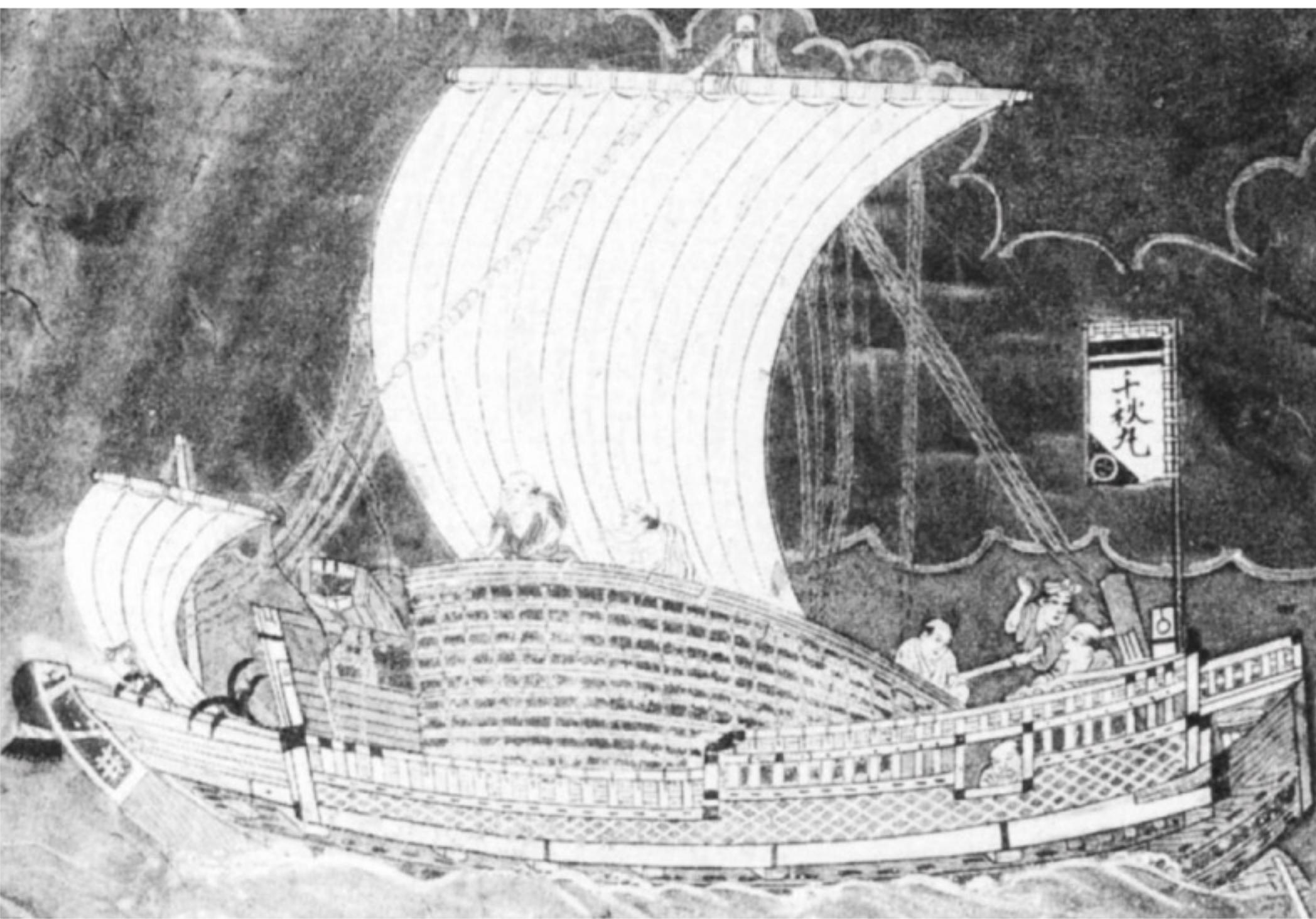
参 多かつた海難事故

江戸・大坂などの大都市で販売される美濃焼物の多くは、今渡街道を通つて野市場湊(今渡)まで馬で運ばれ、川舟をつかい木曽川で桑名まで下りました。その後桑名で海船に乗せ替えられ海上輸送されました。海上輸送には海難事故がつきものですが、特に弘化3年は円治の出した荷物が10回以上の事故にあり、大坂への荷物は毎回事故にあつたことが日記に記されています。当時の海上輸送では、難破しそうな場合、重量の重い鉄や陶磁器を海中に捨て、船を軽くし難破をのがれる「打ち荷」が行われたため、焼物は特に被害にあうことが多かつたようです。円治は事故の知らせを受ける度に現場へ使いの者を遣わしました。損害負担は通常、荷主の円治と注文主で半分ずつ請け負う決まりとなつていたため、円治の損害は非常に大きなものでした。

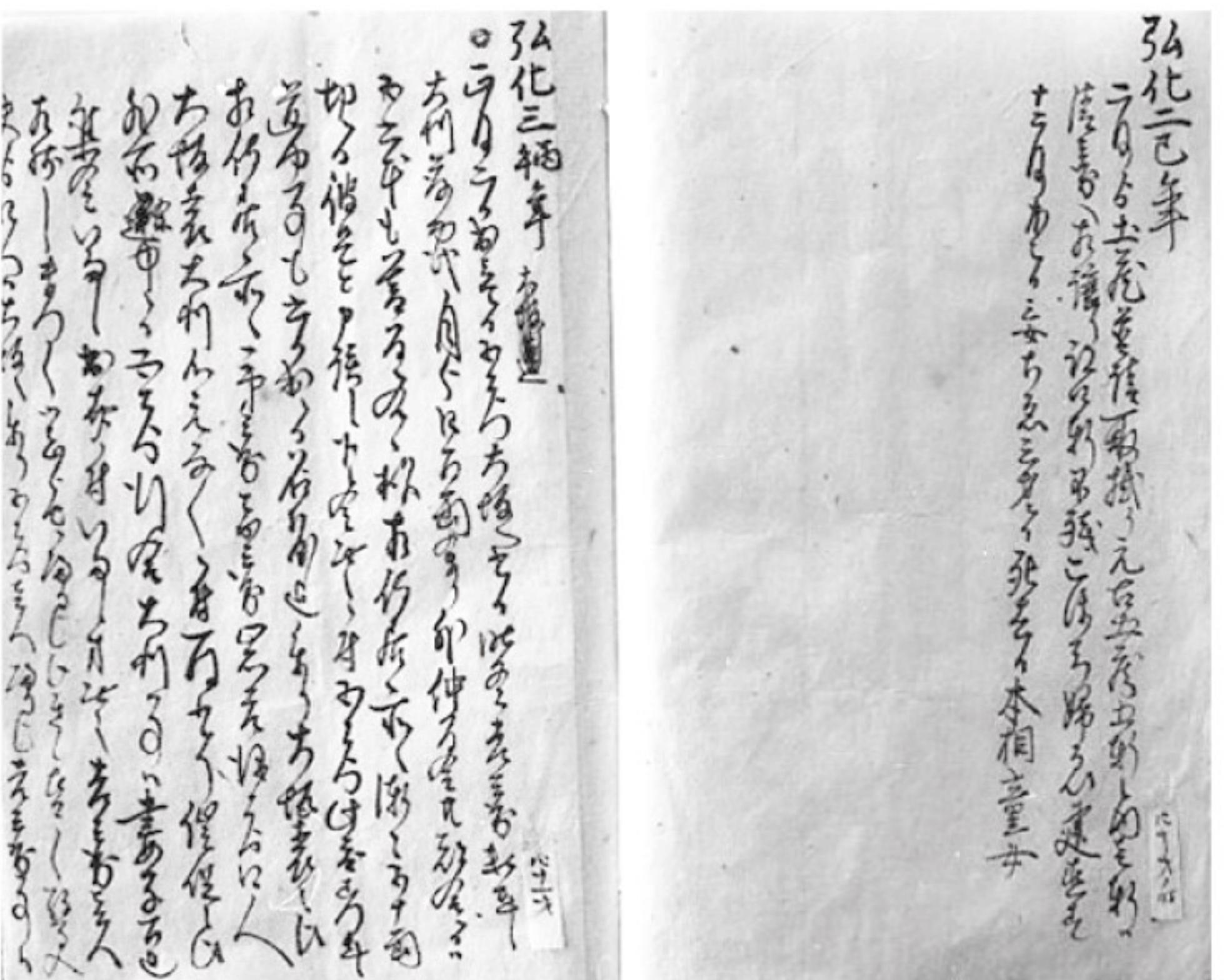
難事も吉事に

弘化3年は円治にとって難事の連續でしたが、この難事が江戸・大坂へ出店の足がかりとなり、西浦店の発展へとつながつていきました。

また、この年の9月と10月に使いの者が、金や銀の扇などを道々で拾い、円治へ届けました。日記には「これは大吉と笑い笑い帰国する」(これは縁起の良いこと大笑いをした)と記されています。日記の中にも難事に屈しない三代円治のおおらかな人柄を見るることができます。



当時の海船・菱垣廻船(「ものと人間の文化史」より)



「加藤五郎兵衛一代日記」弘化3年の部分(西浦家所蔵)

陶器將軍・加藤助三郎

何故36歳で「陶器將軍」とまで云われていたのか。助三郎の活躍を履歴書に基づき記します。

多治見市本町に店を構え陶磁器販売を商いとしていた助三郎は、市之倉町に生まれ、明治3年2月(4歳)から同4年2月(5歳)まで商業研究のため東京へ行き学び、同5年5月(6歳)東京深川区安宅町に陶磁器販売店「美濃屋」を開く、美濃産地よりの独立出張店の嚆矢と言えるものです。その後、同10年に「濃栄組」さらに「濃栄社」と称する株式会社組織となり同22年に「満留寿商会」として陶磁器卸売問屋を開設しました。

海外貿易

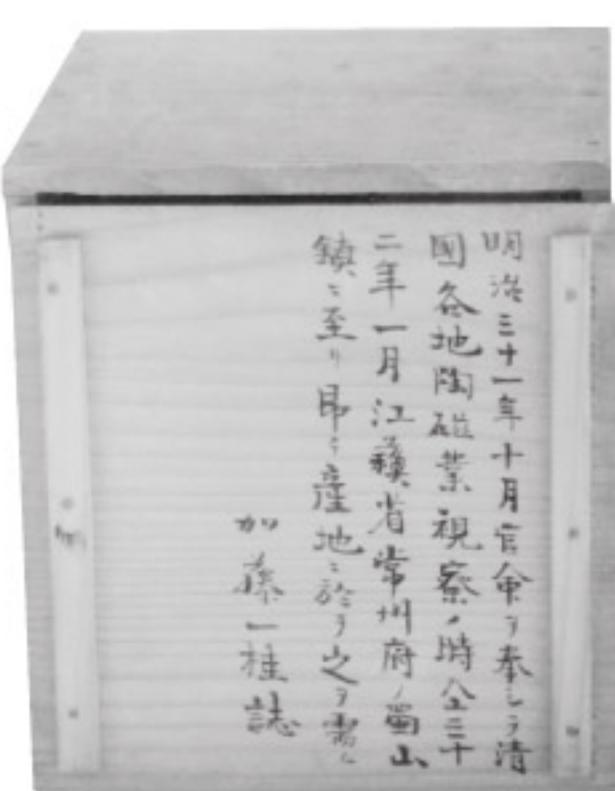
幕末から明治初期の貿易は、横浜・神戸に店を構えた欧米の商館に商品を売り込み買い上げてもらうもので、当時は不平等条約の状況下で商いは難しい状況でした。

やがて同22年に助三郎は、農商務省に願いシンガポール・香港・広東・天津等の日本領事館へ陶磁器250点2219個を送り販売を試みる。このように初めは領事館を介しての商いであったようですが、助三郎は、欧米にも販売を行うが同28年に日本は念願であった不平等条約が改正され諸外国と対等と成れたことにより、同29年に前田正名による実業団体(五二会)などが組織され外国との貿易上の交渉を円滑に進める動きが出てきました。助三郎は東京五二会の創立委員となり陶磁器の輸出を推進しました。同32年には南アフリ

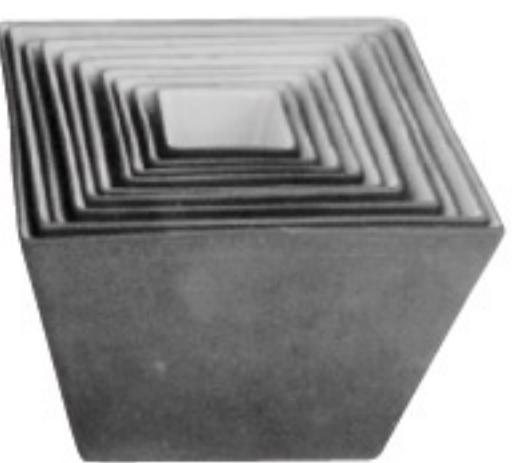
鉄道輸送

同24年鉄道運送株式会社の創立を発起し東京府庁の認可を得て、鉄道局に運賃の特別割引を請願。従来は船積みであったものが鉄道となり、陶器貨物の便利を図る。その後名古屋駅停車場前に支店を設置、さらに大阪駅停車場前に支店を設立し名古屋大阪間の陶器貨物輸送上の利便を図る。同28年には、名古屋陶器運輸合資会社の発起人となり取締役となる。同33年多治見駅構内に数萬の陶磁器が雨ざらしのため、構内に倉庫建設を願い遞信省に出頭、総務長官に許可を得て百五十坪の倉庫を建築して洪益を図る。同34年多治見駅に陶磁器貨物堆積するため、鉄道局へ貨車増発を請願、運輸課長に面談し増発を得て希望を達せり。美濃焼が全国に運ばれて行く要因になりました。

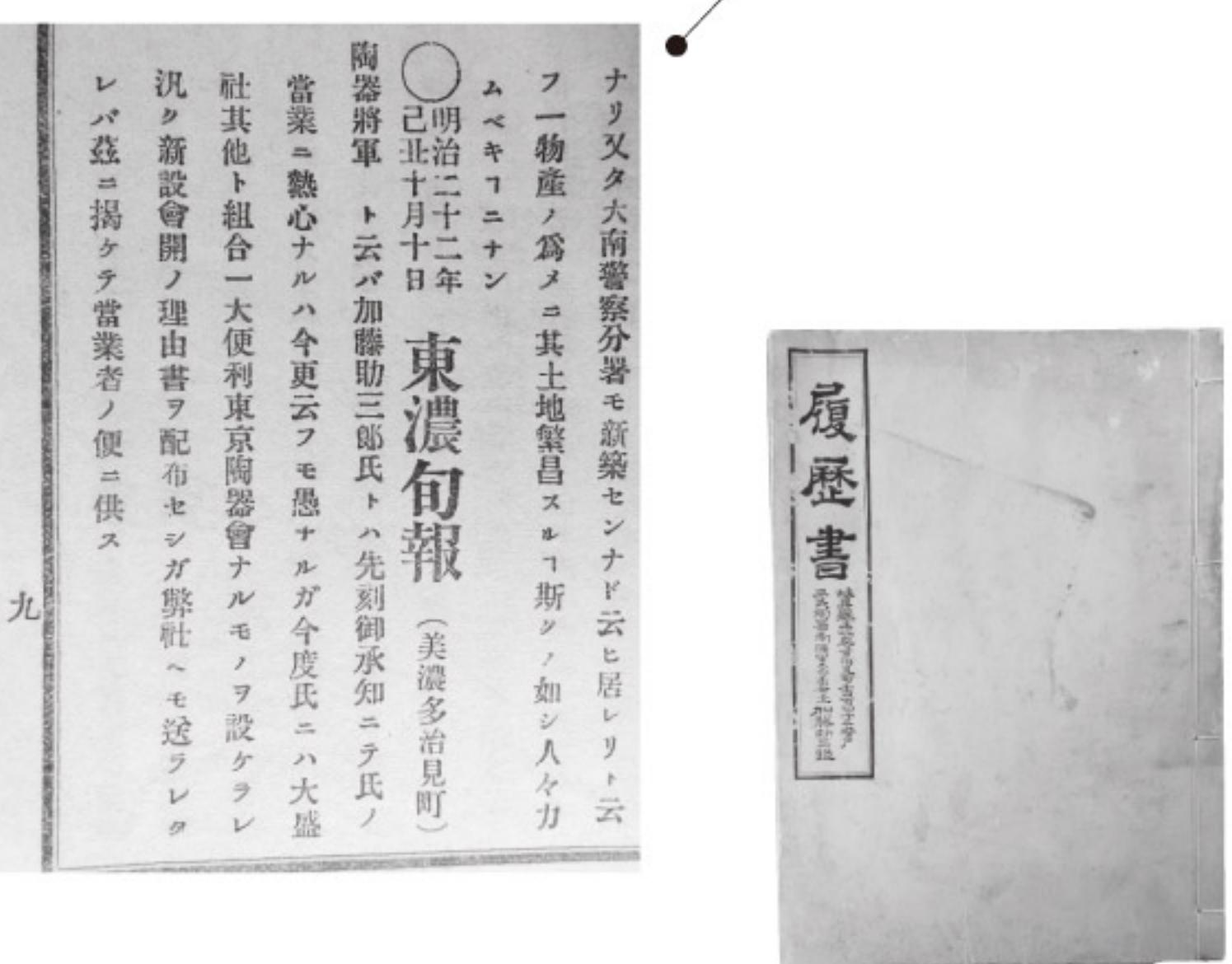
また助三郎は、全国の陶産地を巡り殖産振興の方策について講演をしている。まさに将軍にふさわしく陶業界の発展を願う行動でした。



清国視察にて参考品として
購入した宜興製品



陶器商便覧に
転載した東濃旬報記事



加藤助三郎

(1857~1908)

「多治見商人」加藤助三郎について、明治22年10月10日発行の「東濃旬報」では陶器將軍として紹介されています。内容は「東京陶器会、山栄会を開催するもので、日本橋通り3丁目壽亭にて内外何人を問わず購入者の臨席を仰ぐ」記事です。

明治33年11月1日、岐阜県土岐郡長の水谷弓夫より助三郎に「陶器將軍歌贈加藤助三郎氏」と題し揮毫し贈られた。この時期水谷土岐郡長と助三郎は親密な関係にありました。当時、美濃焼の良品を作るためには、人材育成が重要であることを認識して工業教育(陶磁器講習所開校)を推進したのが、組合長であった多治見商人、西浦清七・加藤助三郎や水谷土岐郡長です。

工業教育

陶磁器科の卒業生は、ワグネルから科学を学び、のちに日本各地に開校した工業学校の校長として赴任し、徒弟教育を行っています。卒業生は、大日本窯業協会を設立し世界の窯業情報を掲載した雑誌などを発行しました。助三郎はその事業を後援をするなど親密な関係にあり、工業の重要性を認識していました。助三郎は、美濃にも講習所が必要と考え開校に向け、郡・県に嘆願したのです。その過程を記します。

学校設立に向けて

明治30年12月、「美濃焼陶磁器改良に関する意見陳述のため岐阜県に出頭する」

同31年1月「陶磁器改良につき湯本岐阜県知事と東京工業学校窯業部を実視」この時点で講習所開校に向け参考となる学校を視察している。講習所開校後は、東京工業学校の卒業生が校長・教師として歴任している。

同31年1月「岐阜県陶磁器講習所設立の意見書を岐阜県厅柿本課長に送る」

同31年2月「岐阜県陶磁器講習所設立の意見書を岐阜県厅柿本課長に送る」

同31年3月「岐阜県陶磁器講習所設立委員を委嘱される」

同31年7月岐阜県陶磁業組合臨時会を開き組合付属として陶磁器講習所設立の認諾を得る」

同32年4月「第一期生徒終業證書授与式へ出席し美濃焼改良の要点を演説」

同32年8月「岐阜県陶磁器講習所を土岐郡立陶器学校に進歩せしむるに付き水谷土岐郡長と共に岐阜県厅に出張す」

同34年4月「土岐郡立陶器学校第一期卒業証書授与式あり」

同35年7月「柿元土岐郡長の嘱託により土岐郡立陶器学校拡張方針計画のため出頭し熊沢陶器学校長其の他と協議」

工業学校開校に向けて、多治見商人の建議の流れがあり学校が設立されたのです、同31年に組合付属から始まり、その後郡立となり、大正2年に多治見市に移転し現在の岐阜県立多治見工業高等学校として10年以上の歴史を重ねています。

当時土岐郡長であつた水谷弓夫は教育者・漢学者であり加藤助三郎表功碑・陶祖碑・記念碑などに書を揮毫している。

多治見工業高等学校

現在の岐阜県立多治見工業高等学校は、明治31年(1898)に窯業専門校として土岐市土岐津町に創立しました。初め岐阜県陶磁器講習所と言い、改称を繰り返し、大正2年(1913)には多治見へ移転して現在に至ります。

そして同校には、明治時代から戦前にかけて収集した多数の陶磁器が存在しています。それらは、かつての教師や生徒をはじめ、おそらく美濃焼業界に携わる人たちも作品製作の際に参考としていたものであり、その結果として作られたものです。ただし、時代の流れとともにすっかりと忘れ去られ、関係者からも顧みられることがなくなっていました。

(財)ポーラ美術振興財団 平成22年度調査研究助成によって岐阜県現代陶芸美術館などが実施した調査を経て、1,500件を超える陶磁器作品を確認することができました。それらを大別すると、国内および海外で製作された陶磁器の参考品、そして同校で製作された陶磁器となっています。これは、他産地にある工業高校等の所蔵品と比較しても群を抜いています。

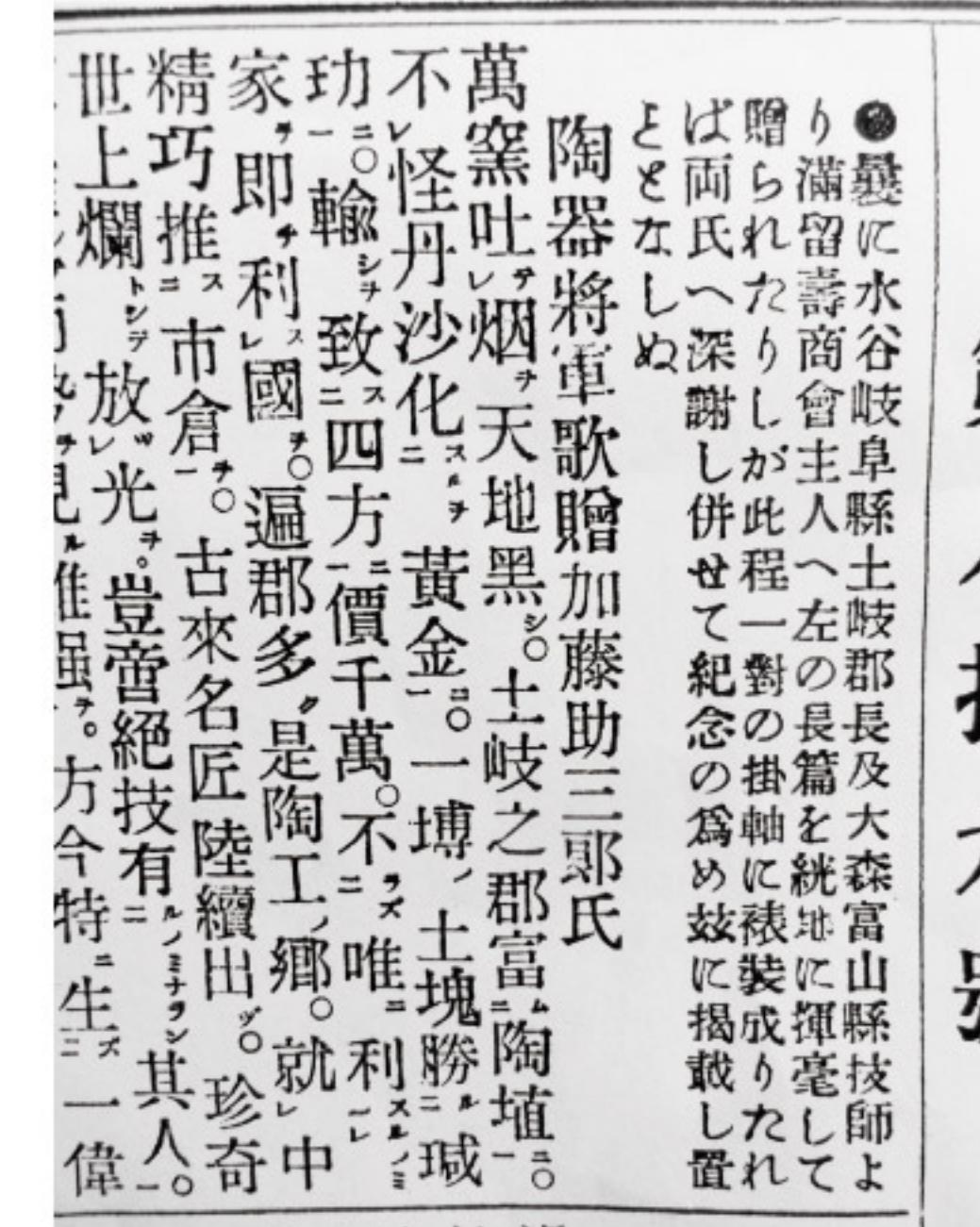
こうした参考品はどのような経緯で学校の所蔵となったのでしょうか?もちろん、学校で購入したものもありますが、実は、陶器商であり同校の設立に尽力した加藤助三郎の相当数にのぼる寄贈があったのです。父である加藤助四郎の商売を継承して陶器将軍と称えられるまでとなり、美濃はもちろん全国の陶磁器産業の発展に貢献したことで知られています。そのような人物が、学校への陶磁器の寄贈という細やかな支援もおこなっていたというのは、たいへんに興味深いことではないでしょうか。



ロイヤル・コバルト・ブルー
彩婦人と子供
20世紀前期



加藤友太郎
彩松にカクス花瓶
20世紀前期



「陶器將軍歌贈」揮毫



岐阜県立多治見工業高等学校

美濃焼の海外輸出と名古屋港

美濃焼の本格的な輸出の開始は、明治10年代後半から20年代のことです。明治時代、名古屋の海の玄関は熱田港で、前身は東海道の桑名までの「七里の渡し」で知られる宮の宿でした。名古屋からは舟に荷を載せて堀川を下り、熱田港経由で四日市へ運んで船積みされました。四日市は横浜港や神戸港の中継港でしたが、水深が十分で大型貿易船の停泊も可能でした。一方の熱田港は、遠浅の湾内に大小の河川が土砂を堆積させ、大型船舶の進入を阻んでいたのです。

鉄道うを敷け。熱田港を大きくしよう

明治25年（1892）に国鉄中央線の敷設が決定し、汽車による美濃焼の大量輸送が実現しようとしていました。しかし陸路で横浜や神戸の貿易港へ運ぶためには、東は静岡や三島などの操車場や難所の箱根があり、西は長浜から船に積み替え琵琶湖を横断して大津の操車場を経ていました。貨車の連結や積み替えにミスが相次ぎ、破損するリスクも大きく、運送店では店員が商品に同行する監視も行っていました。中央線の工事が始まろうという明治27年（1894）、陸・海運を連係させるべく熱田港を浚渫して、新たな港を築こうという声が高まります。名古屋からの輸出品のうちでも陶磁器は高い比重を占め、東海道線開通後は陶磁器を扱う貿易商が名古屋支店を構えたこともあります。産地から最も近い海から船出させたいという思いが一層、強まつてきました。それが、名古屋港の築港へつながります。建設中の明治39年（1906）には海図もなく座礁の危険がある中、巡航博覧会船の「ろせつた丸」（3876t）を熱田港に誘致し、大型船舶の入港できる港の必要性を強く印象づけました。翌年、熱田村は名古屋市に

瀬戸を凌ぐ美濃焼の輸出

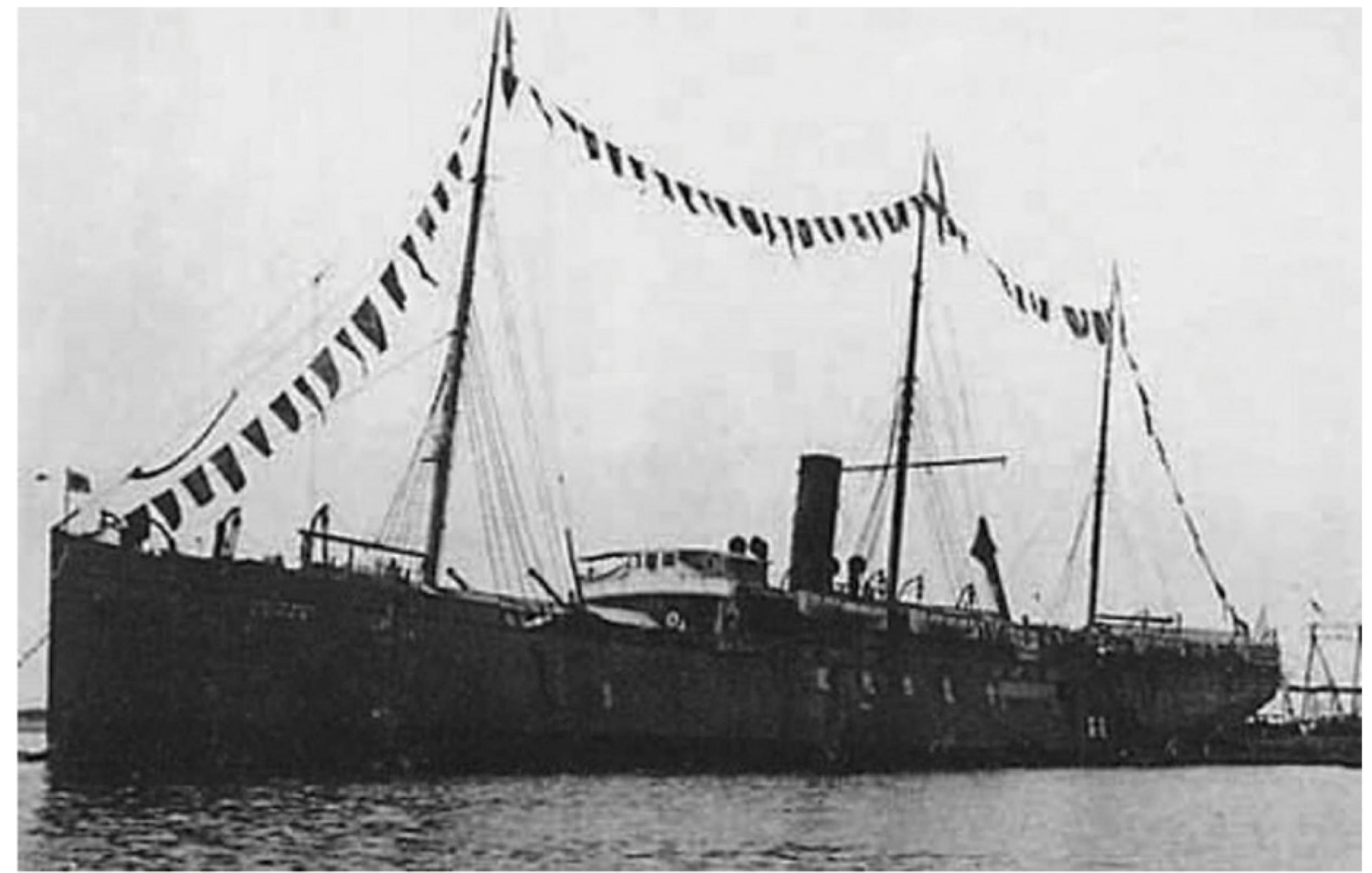
他の産地が美術品的な陶磁器だったのに対し、美濃焼はコーヒーワンドなど日用の洋食器の輸出を主流としたので、よく売れたといいます。美濃では完成品の出荷割合が比較的高かったようですが、名古屋で絵付けする場合は瀬戸製素地との区別がされていませんでした。ただ、明治43年（1910）には多治見の輸出陶磁器産業は、「隆盛に趣き、目下瀬戸を凌ぐの概あり」と記されるほど勢いを強めており、好調な輸出で増産を続ける多治見へ移る瀬戸の職工も多く現れたそうです。実際、美濃焼の生産は従来、国内向けが70%・輸出向けが30%でしたが、明治39年（1906）には国内向け35%・輸出向け65%と逆転しています。したがって明治時代の美濃焼の海外輸出が、日本有数の港の開港を後押しした、といつても過言ではないでしょう。

中央線から臨港線へ

名古屋港は開港後も引き続き、さらに大きな6,000t級の船舶が入港できるよう、第2期工事を始めます。また、明治33年（1900）開通の中央線に加え、明治44年（1911）には名古屋駅から港にいたる臨港線も敷設、美濃焼は世界に通じる海をダイレクトに目指すことができるようになりましたのです。



現在の名古屋港(名古屋港管理組合提供)



ろせつた丸(名古屋港管理組合提供)

明治初期の美濃焼輸出

明治33年(1900)に中央線の名古屋から多治見間まで開通すると、列車を使った美濃焼の輸送が盛んになりました。それ以前は馬や荷馬車、荷車を使った陸上輸送または川を船で下り、荷物を廻船に積みかえて海上輸送というルートを使っていました。

江戸時代から明治時代前半までの美濃焼の輸送ルートとして主に次の3つがあげられます。

- ① 名古屋へ内津を経て下街道を馬で輸送
- ② 信州・甲州方面へ高山村継立で馬で輸送
- ③ 江戸・大坂へ野市場湊(現可児市今渡)から木曽川を積み下げ、桑名から海上輸送

このうち③の今渡から木曽川を下るルートは、①の下街道で名古屋へ出るルートより距離が短く運賃も安かつたため、最も多く使われました。

美濃焼が通った今渡街道

今度までの道は「今渡街道」「多治見街道」「太田道」などと呼ばれ、多治見橋を起点として白山町・宝町・小泉町・根本町を通り国道248号線を北上する約20キロメートルの道のりです。現在では、当時の面影はあまり残っていませんが、道々に残る石造物が往時の賑わいを伝えています。

江戸時代には禁止されていた荷車や荷馬車が、明治時代に入つてから使用されるようになり、今度街道の交通量も増えていきました。それにともない、屈曲で細かった街道の拡幅や改修が必要となり、多治見村の有志の呼び掛けで明治12年(1879)に民費での工事が行われました。翌13年(1880)に工事は終了し、道幅は狭い所で約1.8m、広い所で約3.6m、平均約2.7mになりました。

馬車で陶磁器を運ぶ

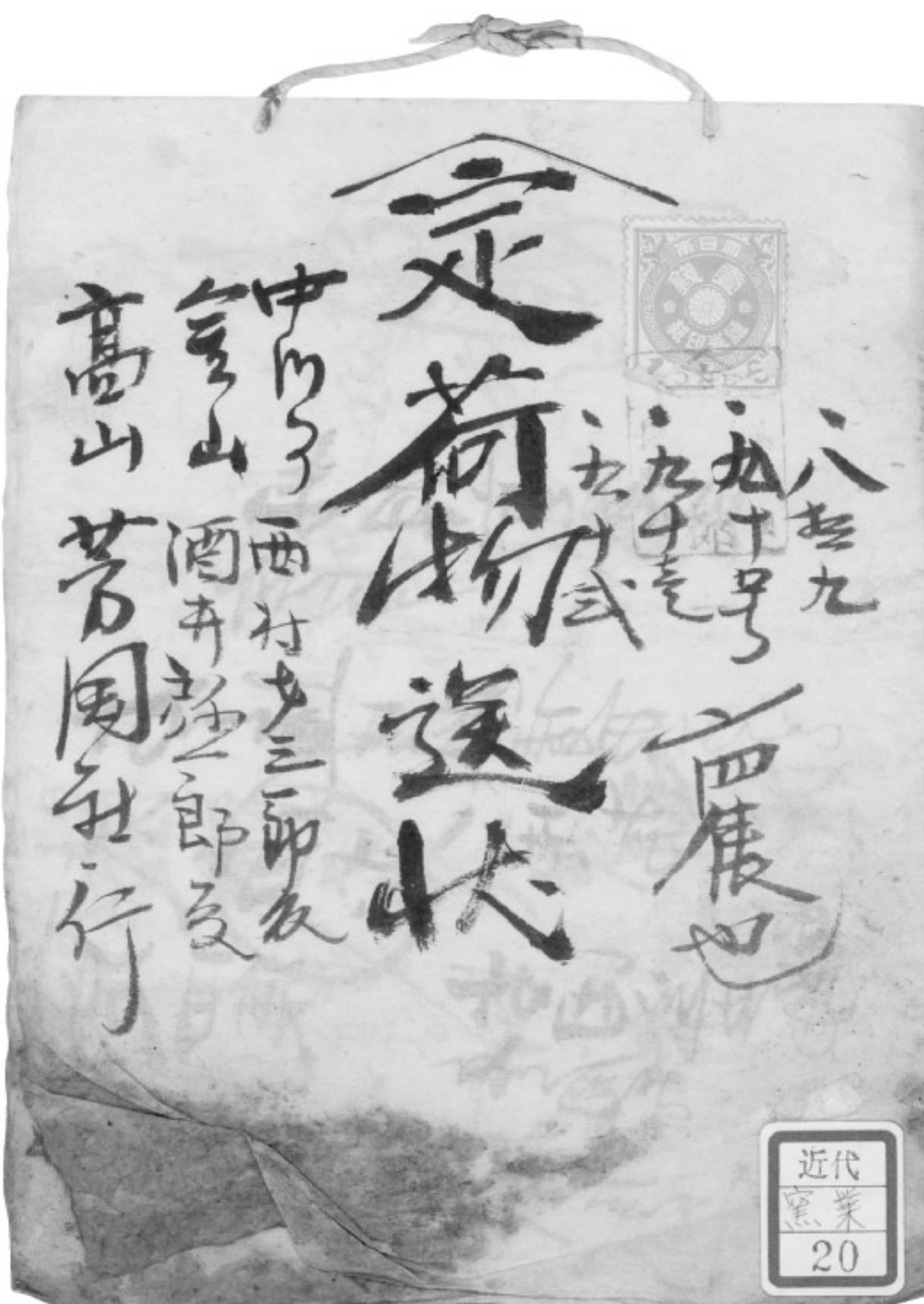
江戸時代からの伝馬制度が廃止されてからは、輸送を宿駅に設立された陸運会社が担うようになりました。

旧豊岡村(現豊岡町近辺)にあつた「ヤマ定」という陶器商が、飛騨高山の窯元で商社でもあつた「芳国社」へ向けて4俵の焼物を出荷したときの送り状が残っています。この送り状には荷物を受け取った日にちと署名があり、飛騨高山まで焼物を運んだ継立の順序がわかります。この時、輸送を取り仕切つたのが加茂郡中川辺(現川辺町)の陸運会社でした。

陸運会社へは運賃の外に手数料を支払いました。今度までは今渡街道を陸路で、木曽川から飛騨川へ舟で出て高山まで、全10日程かかりて運んだことがわかります。



昭和30年代ごろまで馬車で陶磁器を輸送する風景



5/27 豊岡村発
→今渡船問屋・丹羽重蔵
→中川辺陸運会社西村
→中川辺出発金山(現下呂市)
運送会社酒井会社にて
→6/5高山の芳国社着

「荷物送狀」
(明治時代)(多治見市図書館所蔵)

参考文献
「多治見市史通史編上」(多治見市 1980年)
「多治見市史通史編下」(多治見市 1987年)
多治見陶磁器卸商業協同組合

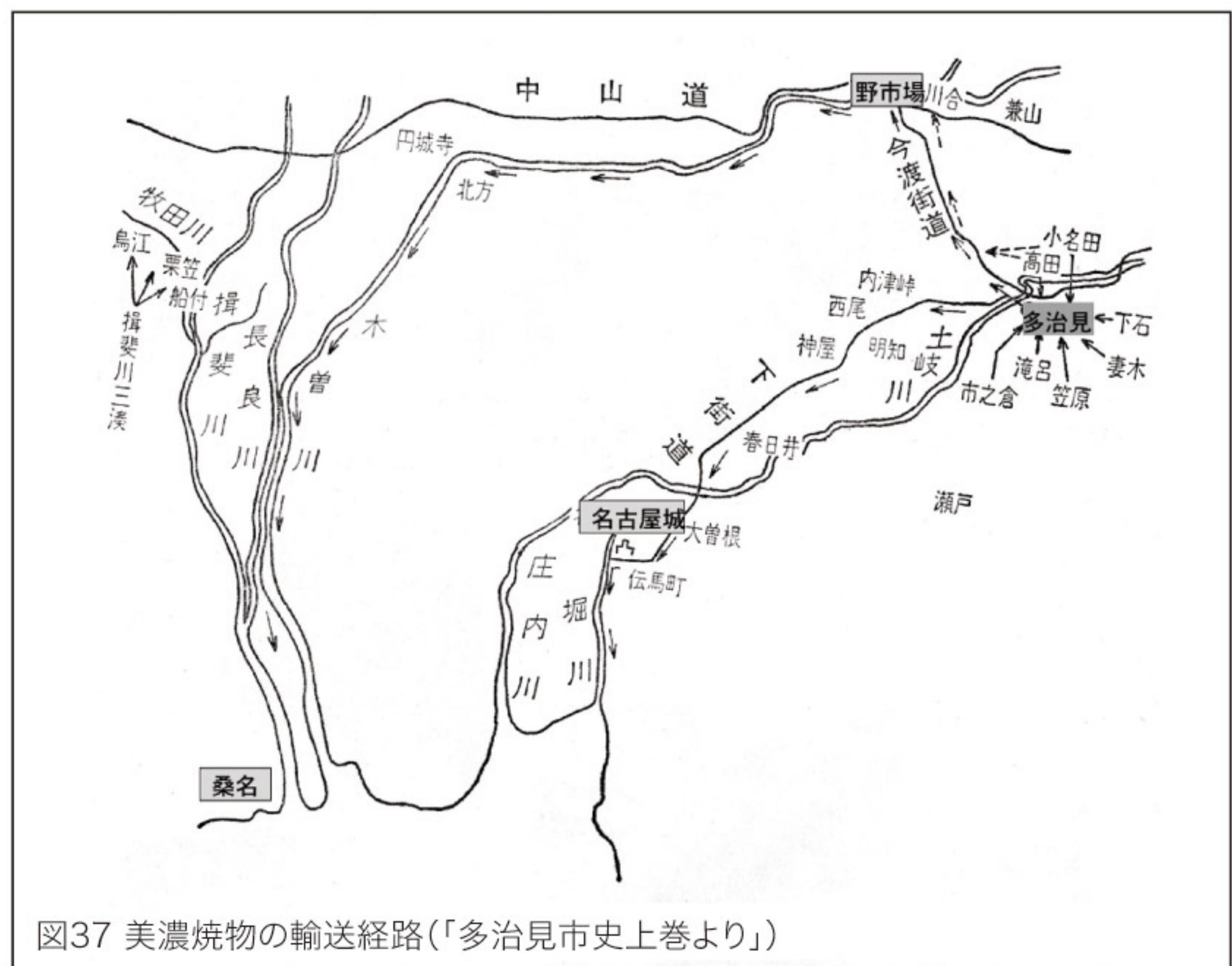


図37 美濃焼物の輸送経路(「多治見市史上巻より」)

明治時代の下街道と陶磁器輸送

明治33年（1900）に国鉄中央線が開通する以前の美濃焼の輸送には、今渡街道を経て木曽川を下るルートなどもありましたが、名古屋に運ばれるものは下街道を通っていました。下街道は、現在の国道19号線の前身ともいえる、名古屋へ向かう際の幹線道路です。江戸時代から明治時代前期までは、馬の背の両側に陶磁器を振り分け積むのが一般的でした。やがて、一度に運搬できる量を増やすために、荷車が用いられるようになります。東濃地方の早いところでは明治20年代から馬車が用いられましたが、陶磁器の集積地である多治見から名古屋を目指すルートの下街道で最大の難所だったのが、現在は岐阜県と愛知県の県境になつていて内津峠です。朝、陶磁器を満載して多治見を発った馬車は、峠を前に麓で休憩しながら次に来る馬車を待ちました。次の馬車が到着するとその馬を借りて、2頭立てにして峠を登り、頂上にいたると、荷物をいつたん置いて馬を再び戻し、もう1台の馬車を引き上げたそうです。麓に近い池田町屋村（現・多治見市池田町）では、駄賃をもらつては馬車を押し、手助けする人もあります。また、名古屋の入口に当たる庄内川の河畔には、馬車引きに酒食、馬には飼葉や水を与えてくれる茶屋があつて、そこで一服してから大曾根の坂を上がり、夕方に名古屋の問屋に荷を降ろし、その夜は市内の馬宿（馬車とも宿泊可能な宿）に泊まって疲れを癒したといいます。

馬頭観音

馬はかつて、農耕や運送など生産と流通の重要な担い手として大切にされ、死ねば馬頭観音像を供養塔として祀るなどしました。馬頭観音は仏教の守護神ですが、牛馬に関する職業の従事が、その供養や無病息災を願つた民間信仰的な存在でもありました。江戸時代後期からは、石仏だけでなく文字を刻んだ石塔も造られます。馬頭観音は、愛馬の墓標として屋敷内に建てたほか、往来時に交通の難所で馬が息絶えた場合はそこに埋め、その上に馬頭観音を祀つたようです。こうした路傍の馬頭観音は境の神や道祖神への信仰とも習合し、村境や辻に祀られるようになりました。辻に建てられて道標を兼ねたものもありますが、それはこうした例のひとつです。多治見市内と可児市内の馬頭観音を見る限り、江戸時代には主に村を単位とする集団が施主でしたが、幕末から明治時代以降の施主名を調べると、「馬持中」「馬方連中」「馬車連中」など、馬による運送を行う人々との関連が認められるようになります。この時期に、馬頭観音信仰と輸送集団が強く結びついたようです。下街道の難所であった内津峠では、運搬途中に馬が疲労で動けなくなったり、馬方が帰りに飲酒して川に落ちたりすることもありました。明治27年（1894）に建立された内津峠の馬頭観音にも、「馬車」「荷車」という銘が刻まれており、こうした輸送集団が内津峠での安全を祈願したもののようにです。



荷馬車（多治見市郷土資料室提供）



内津峠の馬頭観音
(多治見市郷土資料室提供)



参考文献
多治見市編『多治見市の石造物目録』(1975)
可児市成人大学歴史講座編『可児市の石造物』路傍編 (1983)
可児市成人大学歴史講座編『可児市の石造物』神社・寺院編 (1987)
多治見市編『多治見市史』通史編 下 (1987)
財團法人 名古屋陶磁器会館『名古屋陶業の百年』 (1987)

中央線多治見駅開業

鉄道は、物資の大量輸送を可能にし、短時間に遠隔地への人の移動を可能にした近代化の象徴ともいえる技術です。明治維新後、政府はいち早く欧米から技術を導入し、明治5年(1872)に新橋—横浜間に日本初の鉄道が開通します。

中央線は、明治29年(1896)に八王子と名古屋に鉄道局出張所が設けられ、東西両方面から建設工事が始まり、明治33年(1900)に中央西線の最初の路線として、名古屋—多治見間が開通します。このとき多治見駅は、土岐川を挟んで多治見町の対岸、当時の豊岡村に設置されました。駅開業により、周辺には運送店や旅館などが建ち並ぶようになりました。村は一気に活気づきました。

その後、明治35年(1902)には、土岐津(現土岐市駅)から中津(現中津川駅)間が、明治44年(1911)に八王子—名古屋間がつながり、中央線は全線開通に至ります。

トンネル工事と西浦円治(五代)

中央線の建設にあたっては、トンネルや橋梁に数千万個の赤煉瓦が使われました。その多くは愛知県で製造されたものですが、一部は多治見町の西浦円治(五代)が自ら煉瓦工場を設立し、焼成を行いました。

西浦円治は煉瓦の調達を「他方より仰ぐは遺憾なり」として、自ら製造に乗り出すことを決意します。「西浦煉瓦工場」は、明治27年(1894)に設立され、職工数男40名女20名計60名、1基15馬力の蒸気機関が設置されたことが記録されています。同時代の西浦焼を生

産した製陶所の職工数42名、駄知の籠橋休兵衛の製陶所25名と比較しても、煉瓦工場が規模の大きなものであったことが分かります。明治32年(1899)の多治見町議会議事録には、円治が玉野街道(愛岐道路の前身)に専用のレールを敷き、トロッコで煉瓦を工事現場まで運搬したことでも記録されています。しかし、西浦による煉瓦生産の詳細は記録がなく、煉瓦を焼成した窯も妻木坂(現多治見市坂上町から本町付近)にあつたと伝えられていますが、今ではその場所も定かではありません。

美濃焼の鉄道輸送

重量のある陶磁器は、鉄道開通により飛躍的に輸送量が増加した物資です。多治見駅開業により、東濃地方各地で製造された美濃焼が、多治見駅へと集められ、全国へと発送されるようになります。国内の各窯業地においても、鉄道による陶磁器輸送は行われましたが、多治見商人はとくに鉄道をうまく利用しました。大正元年(1912)の主要鉄道駅陶磁器発送量をみると、多治見駅の発送量は約2万4千トンで、名古屋駅を凌いで全国第1位、それに瑞浪、土岐津を加えると、東濃地方の鉄道駅からの発送量が他を圧倒していたことが分かります。

また、多治見商人は自ら鉄道に乗って、全国へ美濃焼の販売に出かけていきました。陶磁器の見本を詰めた風呂敷包みやカバンを背に多治見駅を出発していく番頭さんの姿は、昭和40年代頃まではよく見られる光景でした。鉄道の路線に沿って1駅1駅下車し、各地の陶磁器問屋をくまなく巡り歩いた先人たちの努力が、美濃焼を日本の家庭へと行き渡らせる原動力となつたといえます。

主要鉄道駅 陶磁器 発送量

大正元年(1912)

順位	駅名(都道府県名)			数量(トン)			
1	多治見 (岐阜県)			24,425			
2	名古屋 (愛知県)			22,294			
3	瑞浪 (岐阜県)			5,885			
4	土岐津	岐阜県	5,871	10	笠間	茨城県	2,355
5	京都	京都府	5,137	11	深川	滋賀県	2,232
6	貴生川	滋賀県	4,995	12	有田	佐賀県	2,199
7	大曾根	愛知県	4,438	13	四日市	三重県	2,135
8	武雄	佐賀県	4,206	14	佐那具	三重県	1,712
9	若松	福島県	3,452	15	真岡	栃木県	1,684

参考文献

多治見市教育委員会2014
『旧国鉄中央線トンネル群(愛岐トンネル群)
の文化財的価値についての調査報告』
『多治見市文化財保護センター研究紀要』第12号

多治見陶磁器卸商業協同組合



旧国鉄中央線14号トンネル 2011年撮影

重い見本力バンで拡散

陶磁器見本を詰めた重い革カバンを肩から提げ、汽車に乗っていく多治見商人の姿は、昭和40年代頃までの多治見駅で日常的にみられる光景だったといいます。多治見商人は、鉄道を使って全国を旅してまわり、一駅ごとに下車して、その街の陶磁器問屋を一軒一軒訪ね歩き、美濃焼の注文を取つてきました。

旅まわりによる陶磁器販売は、有田や瀬戸など他の窯業地の商人も行つていましたが、中でも多治見商人は鉄道網をうまく利用し、北海道から南は九州まで全国をくまなくまわり、美濃焼を販売しました。その活力は、他の窯業地の商人と比べてとりわけ大きいもので、戦前の一時期は、樺太や台湾、朝鮮半島まで販売エリアを拡大していきました。多治見商人による販売活動が、明治時代以降に日本全国の家庭へと美濃焼を行き渡らせる原動力となつたといえます。

旅まわりの起源と転機

旅まわりによる美濃焼販売がいつから行われていたかは定かではありませんが、文献では江戸時代後期には確認できます。

また、西浦家文書には、西浦大坂店で京・四国、出雲・鳥取方面、広島方面と地域ごとに担当者が分けられ、旅先に定宿があつたことが記録されており、幕末の西浦店で旅まわりによる陶磁器販売が行われていたことが分かります。

また、明治時代以降の美濃焼の流通にとつて大きな転機となつたのは、明治33年(1900)の中央線名古屋—多治見間の開通でした。これによって、東京や大阪を経由せず、多治見から全国へと直接販売ができるようになつたと同時に、多治見商人が鉄道を使って、より速くよ

り遠くへと出かけて注文を取つてくることが可能となり、美濃焼の流通範囲は格段に広がりました。

多治見商人の販売エリア

現在の多治見市御幸町にあつた大嶽萬三郎商店に残されていた帳簿からは、昭和10年代に一軒の陶器商がどの程度の規模で商売を行つていたかが見えてきます。大嶽萬三郎商店の取引範囲は九州、山陽、関西、関東甲信地方と広範囲にわたり、得意先も150軒程ありました。これを4~5人の番頭がそれぞれ担当地域を決めて受け持ち、旅まわりによる販売を行つていました。取引額が最も大きかつた九州地方の場合、2ヶ月に1回、月の前半と後半とルートを2つに分けて旅まわりを行つていたようです。月の前半は、門司から始まり福岡県と大分県を10日間程で、月の後半は博多から佐賀、長崎、熊本、鹿児島を2週間程で、どちらも鉄道の路線に沿つてまわるルートでした。多治見商人が有田という大窯業地を抱えた九州地方へも果敢に乗り込み、販売エリアを拡大していく様子が分かります。

鉄道から自動車へ

昭和30~40年代には、高速道路の整備や自動車の普及とともに、旅の手段が鉄道から車へと移り変つてきます。自動車での旅となると、鉄道路線から外れた地域での商売も可能となり、現地の陶磁器問屋を介していた取引が、小売店と直接行うことも増え、美濃焼流通に変化が生じていきます。さらにカタログの登場、FAXやインターネットの利用と、時代に応じて商売の方法は姿を変えてきており、現在、旅まわりによる美濃焼販売はほとんど行われなくなつてきています。



北海道旭川の陶磁器店 明治35年(1902)
山竹商店所蔵多治見市図書館郷土資料室提供

多治見橋と西浦円治(四代)

多治見橋は土岐川の南北をつなぐ多治見の中心地に架けられた唯一の橋でした。また中仙道の脇街道であつた下街道の一部として重要な役割を果たしていました。明治時代の初めまでは冬場になると沿岸の多治見村と長瀬村が隔年で土橋を架けていました。しかし夏の増水期には流失してしまうため、夏場は渡し舟が人や物を運び、それぞれ舟賃・橋賃の通行料を徴収していました。

明治13年(1880)の明治天皇行幸に伴い、多治見橋は官費による本格的な木橋に架け替えられました。これにより荷車・牛馬車の輸送が本格化しましたが、翌年の豪雨で流失してしまいました。一度頑丈な木橋を体験した地域住民にとって、橋のない不自由さは堪えられないものでした。そのため多治見村や長瀬村の有志者から架橋資金を募集して、明治15年(1882)に第2次架橋が実現しました。ところが開通式の1カ月後、またも土岐川の増水により多治見橋は流失してしまいます。一度ならず2度までの悲運に、その後はしばらく再建の計画も出ませんでした。

丈夫で魅力な多治見橋

明治10年代後半は人の往来や物資の運搬がますます頻繁になり、美濃焼販売においても海外などの新しい市場開拓に乗り出そうとしていた時代です。仮橋の多治見橋では、普及し始めたばかりの荷馬車は通行できず、一旦荷を下して人が運び対岸で積み直していましたし、増水期には減水を待つ荷物の山が両岸にうずたかく積まれるような状況でした。

消防組と私設消防組を組織

4代圓治は弘化3年(1846)に生まれ、初名を五郎兵衛、後に圓治と改めました。明治21年(1888)に5代圓治に代を譲つて隠居すると、耕と名を改め、明治28年(1895)に50歳の若さでこの世を去りました。また娘婿には明治29年(1896)に設立された多治見貿易合資会社の社長として活躍した西浦猪三郎がいます。

50年という短い生涯の中でも、多治見橋架橋以外にも多治見にとって重要な役割を果たします。そのころ人口が増加し住宅が密集していた多治見では、火災が人々の生活の中で最も恐ろしいことの一つでした。都市部や城下町、宿駅には江戸時代より火消組などの組織がありましたが、多治見のような村落には消防組織はありませんでした。明治10年代に多治見の住宅密集地で相次いで火災が起こったこともあり、明治17年(1884)に私設の多治見消防組を組織しました。竜吐水という消火ポンプを2台備え、火の見やぐら・まとい・梯子・鳶などの設備も用意しました。この私設消防組の組織が近隣住民への刺激となり、その後の公設消防組へとつながっていました。



明治19年に4代圓治が架橋した多治見橋。
川北より旧多治見町を望む。(明治30年代撮影)

西浦焼と五代西浦円治

明治5年(1872)に窯株・仲買株制度が廃止となつて生産・販売が自由化され、多治見は美濃焼の集散地として活気にあふれました。当時の美濃焼は日用雑器がほとんどで、粗製乱造のそしりをまぬがれられませんでしたが、そんな中美濃焼の質の向上に努め、国内外の販売に尽力した陶器商に5代西浦圓治がいます。

自社工場での製造

5代圓治は幼名を繁太郎といい、安政3年(1856)に4代圓治の甥として生まれました。父親の勘三郎は岩村から養子にきた4代圓治の姉婿で、まだ幼かつた4代圓治の後見人として西浦本店の経営を任せられ、支配人として活躍しました。

明治時代になつてから3代圓治は、市之倉の工場で細密な染付製品を製造し輸出に着手していました。明治21年(1888)、繁太郎は32歳で5代圓治を襲名し、自宅前の屋敷を絵付工場に改造して、上絵付製品の製造を始めました。しかし当時の多治見の上絵付技術はまだ低かったため名古屋などからも腕利きの職人を集めました。翌年には名古屋に進出し、東区東片端に400坪もの広さの工場を建設し、総勢60名の職人が働いていました。製品は花瓶・コーヒーワン皿などで金を施したものでした。

明治27年(1894)に多治見の尾張坂に窯を築き、西浦辰太郎を工場長に迎えて西浦焼を代表する吹絵装飾の「釉下彩」などの製品を作りました。画工も九谷・瀬戸・名古屋から招き、最盛期には120

名もの職人がいたといいます。80間(約144m)、幅2間1尺5寸(約4m)という立派な橋でした。また総経費は4520円で、橋躰を徴収して10年間で償却する計画でした。これ以後多治見橋は洪水に流されることなく、明治43年(1910)の架け替えまで通行する人々を支えました。

輸出と万国博覧会への出品

輸出に足る高い技術の製品を生産できるようになつて、横浜に開業した「西浦商会」では海外貿易も手掛けていました。明治29年(1896)に「多治見貿易合資会社」を組織、同32年(1899)にはボストン支店を開き販路拡大に努めました。

また、5代圓治は数々の博覧会へ焼物を出品し、明治22年(1889)のパリ万博で銅賞を、同37年(1904)セントルイス万博で金賞を、同42年(1909)アラスカ・ユーロン太平洋博で名誉大賞を受賞しました。

後継者育成に力をそそぐ

尾張坂に窯を築いた翌年には、45名の徒弟を受け入れて技術者の養成を図りました。また明治28年(1895)に設立された「岐阜県陶磁業組合」では、組合長の加藤助三郎らとともに岐阜県立多治見工業高校の前身となる「岐阜県陶磁器講習所」を開校するなど、5代圓治は将来の美濃焼の発展を見据え、後継者の育成に力をそそぎました。



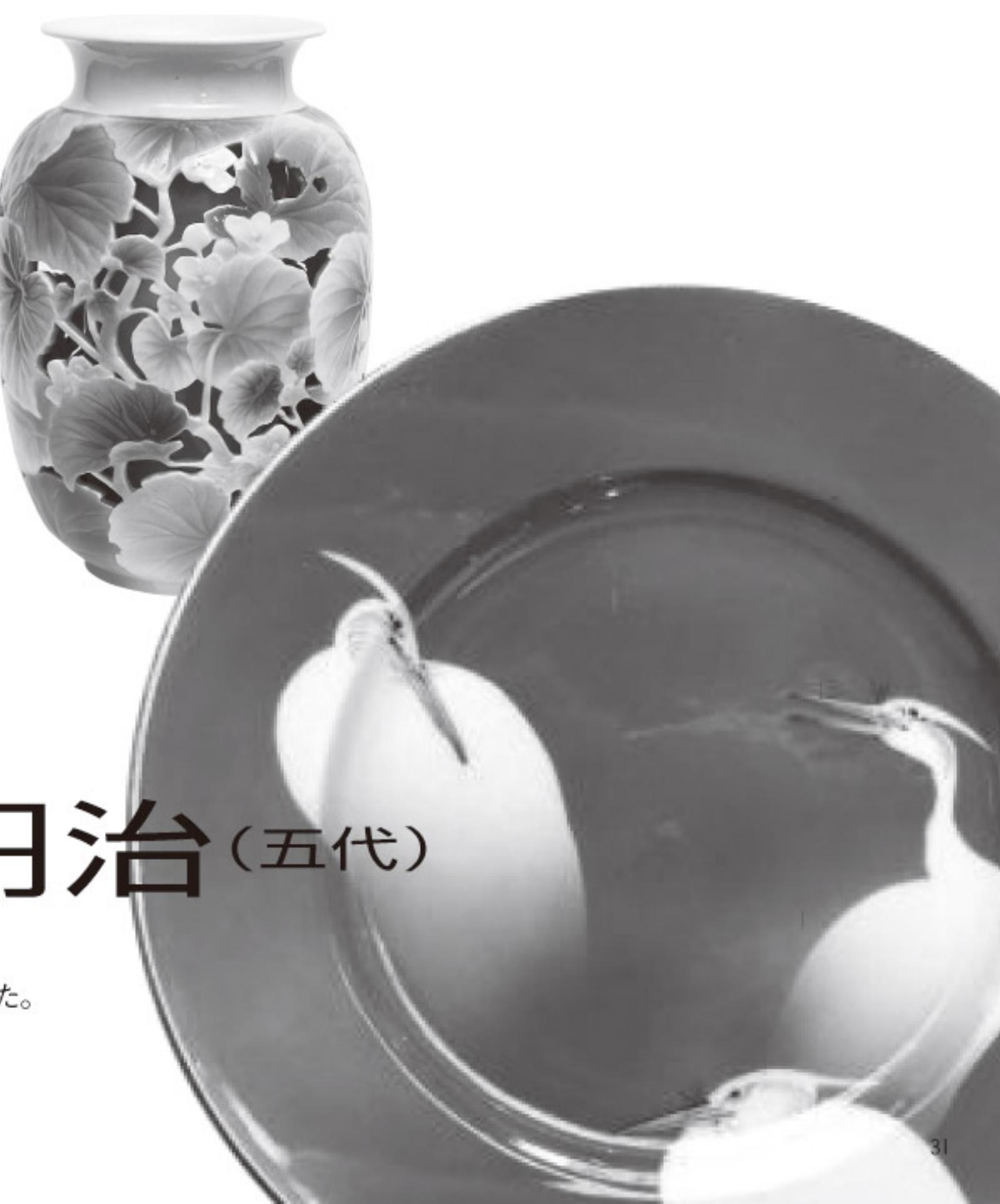
尾張坂に築いた登り窯。ここで西浦焼が作られた。



西浦円治 (五代)

(1806~1884)

美濃焼の品質を高め、信頼を築いた。
西浦焼の吹絵装飾を円外に広め
国際的に高い評価を得た。



幕末から明治初期の貿易

開国当時の日本人は、外国の所在すら知らない状況下であった。横浜・神戸の居留地に店を構えた外国商館へ、日本の業者が売り込むことにより商いが成り立つもので、外国商人の有利な条件によるものが大半であり商取引は困難であった。その様な状況下であつたが、明治20年代になると、一時期西浦商店（濃陶社）に奉公していた春田鉄次郎などはアメリカニューヨークより出張していたA・Aバンタイン社横浜支店長のコルトン氏に愛顧を受け、その基礎を固める事が出来た。

当時の日本陶磁器は、技術も優れていたので重要な輸出品として販売されました。

新たなる会社

明治28年（1895）日本は、不平等条約を解消し晴れて諸外国と交易が対等になつた。同年11月に西浦圓治・西浦道太郎・西浦清七・西浦市兵衛・西浦繁次郎・春田鉄次郎・山田銀次郎・加藤政兵衛・工藤新助らにより多治見貿易合資会社（写真1）を設立し、代表に西浦道太郎・西浦圓治、支配人に春田鉄次郎が就任した。

美濃から直接海外に販売するための支店を開設することを目的とし、支配人春田鉄次郎がアメリカへ視察することとなり関係者が集まり送別会が開かれる、

「明治31年（1898）9月多治見貿易会社支配人春田氏の陶磁器販路拡張のため渡米するにつき多治見町村田楼に於いて水

谷郡長、横井警察署長、坂田町長、西浦圓治、西浦猪三郎、加藤久次郎、加藤助三郎の諸氏五十余名にて送別会が開かれた、同地の陶器商人として海外万里へ販路拡張に渡航する者氏をもつて嚆矢となす……」。（註1）

春田鉄次郎 アメリカへ

明治31年の秋、春田鉄次郎はアメリカへと船上の人となる、三等船室に移民と雜居してアメリカに着き、太平洋岸から東部都市に進むに至り、はじめて眞のアメリカを見た、ボストンから更にニューヨーク・フィラデルフィア・シカゴ、など繁栄を極める国を直視。翌年の春に帰国して報告、支店開設の準備を整え、明治32年（1899）秋ボストンに支店を開設。やがて明治38年（1905）頃は日露戦争の対米好評による好景気にて順調であった。明治42年（1909）にはニューヨークに支店（写真2）を開設した。しかしその後アメリカ不況により販売不振や諸事情があり明治末に会社は閉鎖した。

多治見貿易会社

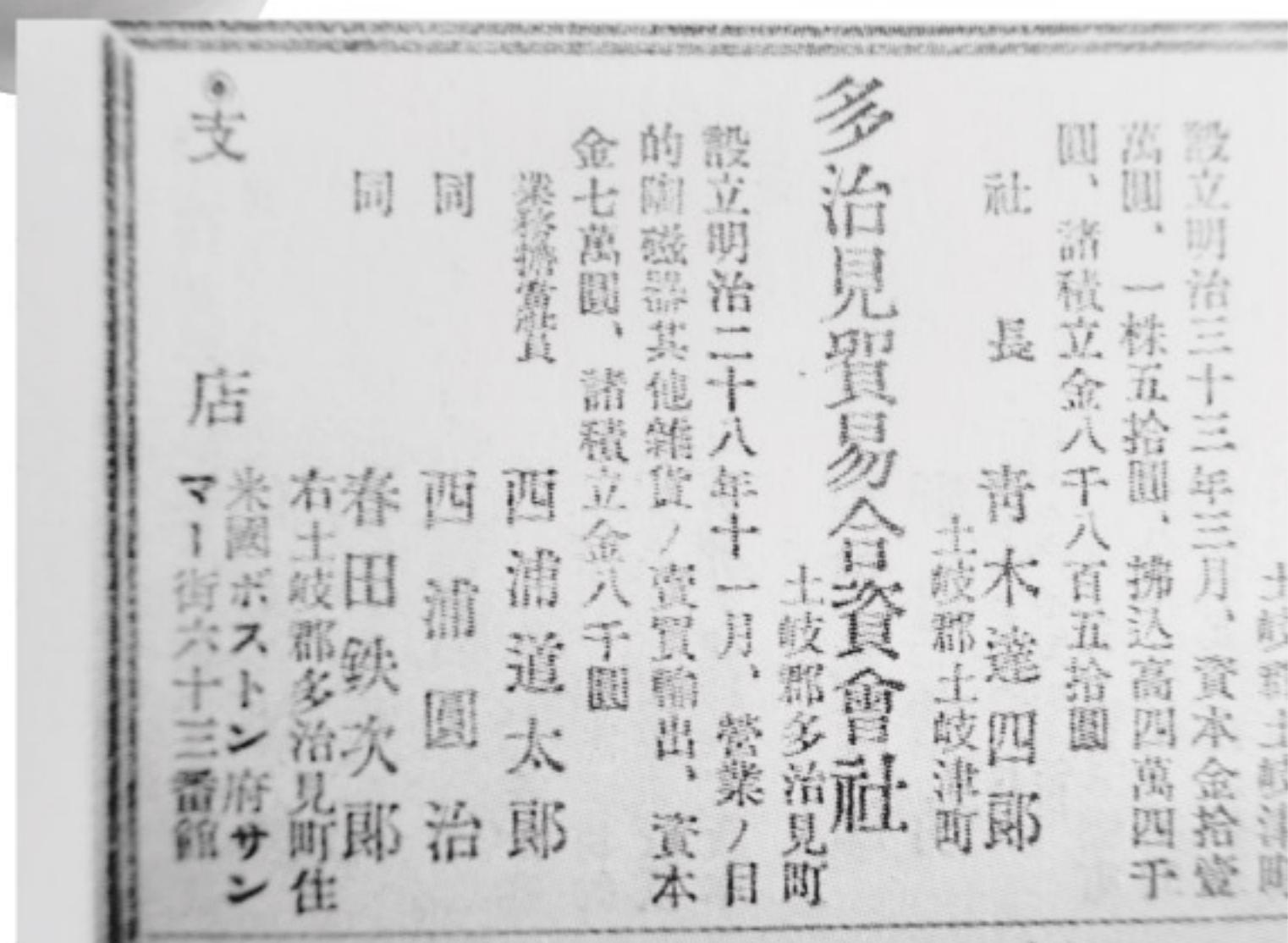
多治見貿易会社の閉鎖後、春田鉄次郎や西浦一、西浦芳太郎ら関係者は事業を引き継ぎ新たに春田商会として発足、その後太洋商工株式会社（写真3）となりニューヨークなどに店を構えるなど、名古屋でも有力な貿易会社として発展しました。現在も名古屋市東区代官町の名古屋陶磁器センター隣に、春田氏が建設した5階建の太洋商工ビル（写真4）が残されています。



（写真3）昭和初期 太洋商工製 ポット



（写真4）春田太洋商工ビル



（写真1）多治見貿易合資会社



（写真2）多治見貿易会社広告

山竹商店の中国貿易

美濃焼の海外への輸出は、幕末に西浦円治(三代)が横浜の外国商館を通して行つたのが、始まりです。

明治18～19年(1885～86)頃には、大阪の商人を介して中国貿易が行われるようになり、日清戦争(1894～95)後、国内向けの販売が不振となり、滙呂などでは国内向けの生産から、輸出向けのコーヒー碗へ生産品を転じる動きが起ります。この頃、貿易拡大に積極的に動いたのが加藤助三郎と日比野新七で、それぞれ明治31年(1898)と明治39年(1906)に中国に視察に出向いています。

明治39年には、「東濃貿易商組合」が創設され、当初は4名の組合員でスタートしましたが、少しづつ加盟者は増えていきました。ただし、当初はほとんどが横浜や神戸の貿易商を介して、美濃焼の輸出を行つていたとみられます。その輸出先は北米、ヨーロッパ、オーストラリア、中国などでした。

中国市场を拓く

山竹商店の日比野新七は、明治39年春、農商務商の嘱託として中国にわたり長江沿岸や景德鎮を視察、同年6月に上海のイギリス租界南京路に山竹の支店を開設します。その後も新七は毎年中国に渡り、中国貿易の拡張を進めます。大正8年(1919)10月には漢口支店を開設、その後、南京、常熟、奉天と支店を増やし、最終的には、戦前の山竹は多治見を本店とし、中国に5つ、瀬戸、大阪に各1店舗ずつと、7つの支店をもつまでになりました。

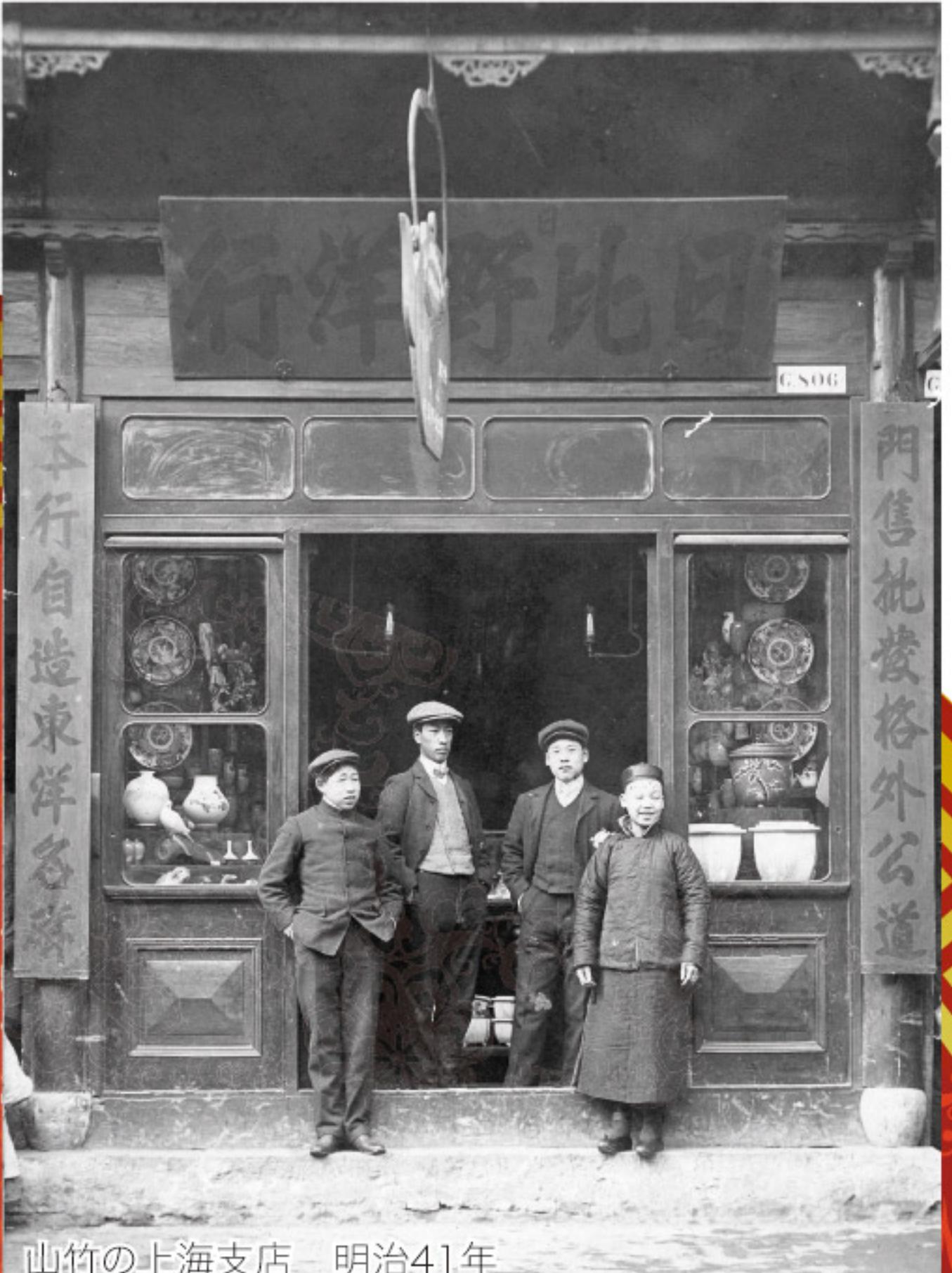
山竹の中国での販売品には、必ず登録商標を附し、山竹の商品であることを明確にして販売することで、現地での信用を得ようとしました。中国の支店では、日本人の店員のほか、現地採用した中国人も数名雇用して、商売を行つていました。明治45年(1912)の上半期の、上海支店の販売額は34万円以上と記録されています。

山竹が中国で販売した商品は、『多治見町史』によると「飯茶碗、酒杯、皿類、急須、珈琲碗、花瓶、丼、火入れ、痰吐き、口漱ぎ、その他装飾品等」と記録されていますが、それらが具体的にどんな商品だったかは定かではありません。

山竹の登録商標



山竹の漢口支店 昭和16年



山竹の上海支店 明治41年

高田徳利の販売

酒屋の店名や屋号などが筆で書かれた「高田徳利」は、明治時代から昭和33年頃まで高田地区と小名田地区で作られました。「高田徳利」は、酒屋が客に貸し出し、客は空になった徳利を店に戻し、またそこへ酒を入れてもらって購入するという使われ方をしました。別名「貧乏徳利」とも呼ばれ、明治時代以降の貧乏徳利は、高田徳利と丹波立杭焼（兵庫県）、有田焼（佐賀県）が三大産地として国内流通範囲を三分しており、高田徳利は琵琶湖の湖北地方を境に東日本一帯に流通しました。

高田地区は「白粉土」という良質の陶土が産出したことで、江戸時代後期（19世紀代）から徳利の一大産地になりましたが、隣接する小名田は高田のような陶土には恵まれず、生産量は少ないものでした。そのような背景もあり、高田徳利は、主に高田の窯屋が生産し、小名田の商人が販売をするという構図ができあがりました。

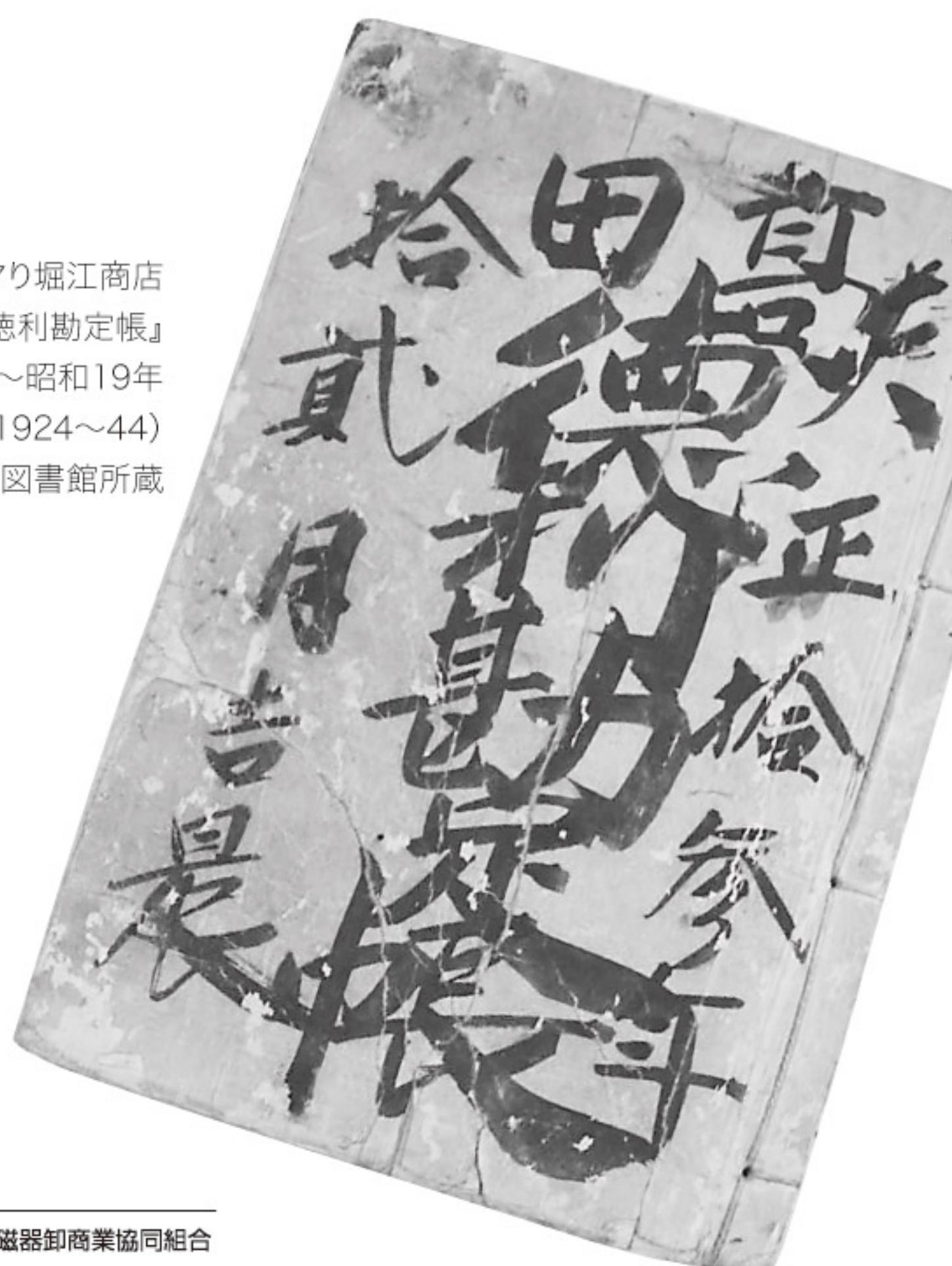
江戸時代の高田小名田の徳利は、灰釉を全面に掛けた文字のないもので、江戸へと出荷された後、釘状の工具で酒屋の屋号が彫り付けられていました。本焼成前に鉄絵具で文字書きする、いわゆる「高田徳利」が作られるようになるのは明治時代以降のことです。明治時代になると、交通網が発達し、しだいに鉄道網も整備されたことから、商人が多治見から全国へ直接出かけていくことが容易になっていきます。高田徳利の販売商人も、鉄道を使って東日本の酒屋を一軒一軒訪ね歩くことにより、それぞれの酒屋の注文に応じ、屋号や酒の銘柄を下絵付で入れるという、きめ細やかな対応が取れるようになります。

市之倉の盃。滝呂の洋食器

近代の美濃焼は、市之倉の盃、笠原の飯茶碗、滝呂の洋食器…といったように、各窯場で生産された様々な製品が多治見の陶器商の元へと集められ、全国の陶磁器問屋へと販売されるという仕組みがありました。ところが、高田徳利だけは、販売先が酒屋に限定されるという商品の特殊性から、多治見の陶器商へは販売されず、ほとんどが小名田の商人によつて販売されたようです。

小名田の商人は、見本の徳利を詰めたカバン（「フーテンの寅さん」のような革のトランクが多かつたそうです）を持ち、多治見駅から汽車に乗つて、東日本の酒屋をまわり、徳利に書く文字の注文を取つてきました。小名田の「ヤマリ堀江商店」には高田徳利販売に関する帳面が残されていましたが、そこからは福島県から茨城県栃木県、東京23区や横浜などを販売先とし、旅の往き帰りに中央線沿線の長野県や山梨県、東海道線沿線の静岡県や愛知県などで下車して、商売を行つていた様子がわかります。

高田徳利は、大正12年（1923）年の関東大震災直後、江戸時代以来の好況期が訪れます。わずか数年でガラス瓶に押され、需要が激減します。徳利の需要激減に直面し、小名田の商人は、それまで取引のあった酒屋の販売ルートを活用し、小皿や盃などに印を入れた「印物」を販売する「印物屋」へと転換していきました。酒屋から次第に販路を広げ、上記の堀江商店の帳面にも、昭和初期～10年代にかけて、お茶屋、醸造店、雑貨屋等、さまざまな店で印物の注文を取り、販路を広げていく様子が読み取れます。



ヤマリ堀江商店
『高田徳利勘定帳』
大正13～昭和19年
(1924～44)
多治見市図書館所蔵



多治見市図書館所蔵



高田徳利と印物屋

陶磁器に店名や屋号、住所などの「印」を入れた商品を「印物」とい、美濃では印物を専門に扱う「印物屋」と呼ばれる商人がいます。印

物屋の発祥は、高田徳利を販売した小名田の商人と考えられます。

明治時代以降、高田徳利は主に小名田の商人が販売を担い、徳利の見本を持って東京など各地の酒屋をまわり、徳利に書く文字(印)の注文をとつてくるという販売を行っていました。しかし、昭和初期になると、ガラス瓶の普及により高田徳利の需要が激減していきます。そのときに小名田の商人が取った対策が、それまでの商売相手だった酒屋を中心に、印を入れた盃や小皿などを販売することでした。

印を入れた盃や小皿は、盆暮れや開店記念などに顧客に配布するための商品で、一度に同じ商品の注文がたくさん入るという特色があります。また、取引相手が陶磁器問屋ではなく、やきものることを知らない相手だったので、比較的価格を高く設定できたなどの利点がありました。取引相手は、次第に酒屋から広がり、酢や醤油などの醸造店、お茶屋、雑貨店、喫茶店など様々な店から注文を受けるようになり、小名田の商人は、高田徳利の販売から印物屋として商売を発展させていく人たちも出てきました。

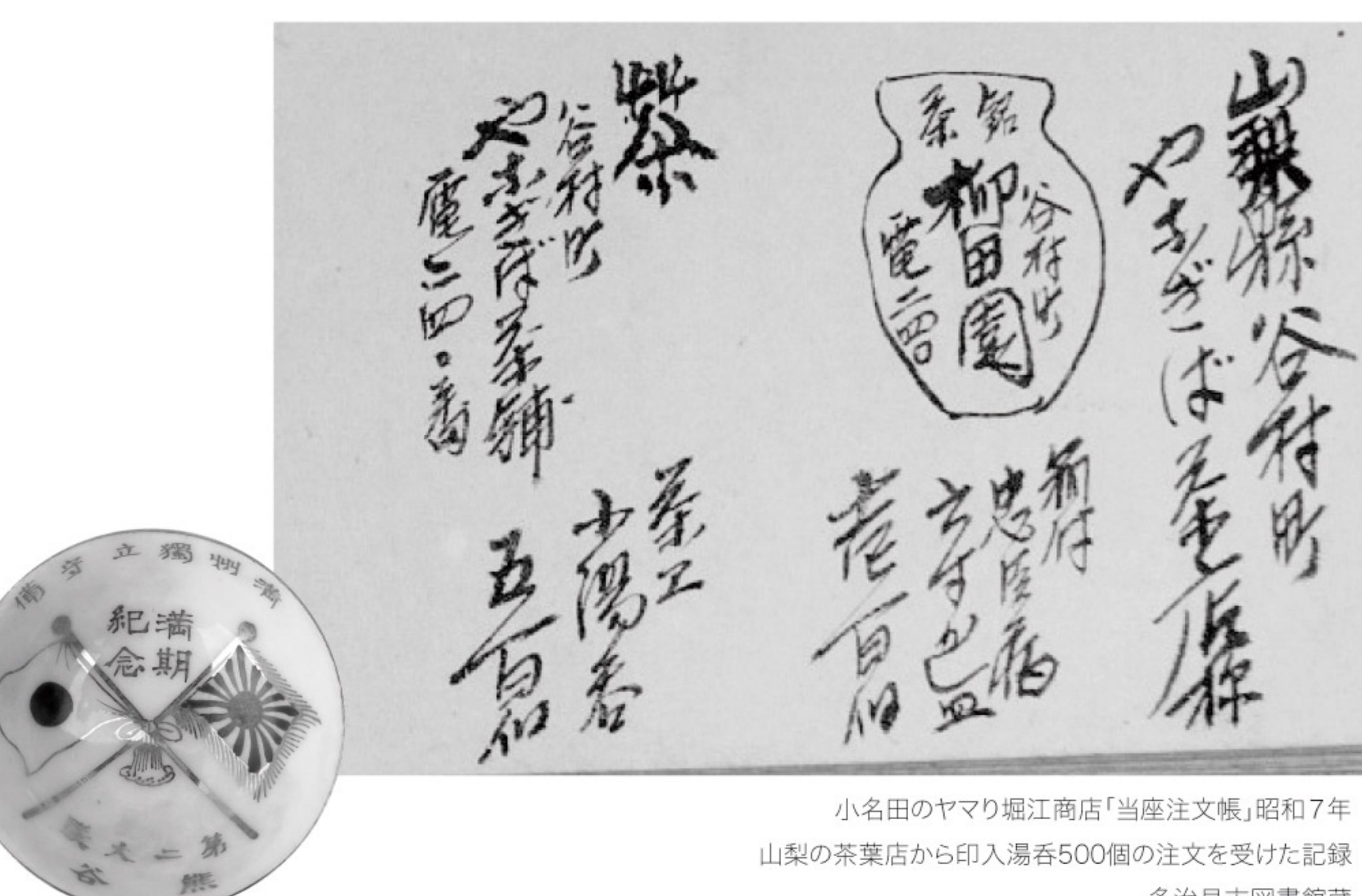
新興商人と印物

戦前、旧多治見町の本町通りに建ち並んだ陶器商は、主に消費地の陶磁器問屋を相手に商売を行っていました。そこで修行をした奉公とんどありませんでした。それに対し、印物屋は取引相手が陶磁器問屋でないことから、一から商売を始めようとする人たちも参入しやすかつたといえます。そんな背景から、印物屋は小名田発祥の商人に加え、しだいに新興の商人が増えていきました。

記念品としては手ぬぐいなど陶磁器以外の商品もありましたが、特に人気のあつたのが磁器製盃で、日露戦争後に出荷量が増えていったものです。除隊記念品を配る習慣は、一時期政府による禁止令が出されたこともありましたが、それによって習慣が廃れることはなかつたようです。連隊前には除隊記念品を専門に扱う店があつたほどでした。当時、そのような専門店から印物を扱う多治見の商店へと記念盃の注文が入ってきました。

大正時代から昭和10年代にかけて、市之倉で生産された白素地に、多治見で日の丸や旭日旗、桜などの絵柄が上絵付された盃が、全国へと大量に出荷されていきました。記念盃は、戦争、兵役制度といった、まさに時代を映す印物です。

時代を映す印物・除隊記念盃



小名田のヤマリ堀江商店「当座注文帳」昭和7年
山梨の茶葉店から印入湯呑500個の注文を受けた記録
多治見市図書館蔵

除隊記念盃 昭和初期
多治見市教育委員会蔵

戦中の多治見商人

戦前、多治見本町通りに建ち並んだ陶器商は、何人もの番頭を抱え、手広く商売をする大店でした。こうした大店の経営者は、自ら旅に出向いて注文を取つてくることはほとんどありませんでした。旅回りは番頭が担当し、それぞれの番頭が自分の担当地域へと販売の旅に出掛けに行きました。

ところが、昭和12年（1937）に日中戦争が始まると、その番頭たちが次第に出征していくようになります。当時、美濃西部陶磁器商業組合では、組合員やその店員が出征する際、10円から2円の慰問金を出しています。戦況が悪化してくるにつれ、出征者は増加していきました。店の番頭が次々に出征していくと、旅まわりに出るもののがいなくなったり、陶器商の商売は立ち居かなくなつていきました。

御幸町にあつた大嶽萬三郎商店に残された帳簿からは、昭和15年
までは九州、山陽、関西、甲信越と手広く商売を行つていたのが、昭和
16年に急に商売を停止した様子が読み取れます。このことには、番頭
の出征も大きく関係していたと思われます。

戦後の新興商人の舌躍

昭和20年の終戦直後、日本はあらゆる物資が不足し、陶磁器の需要も多くありました。しかし、戦前の大好きな陶器商は、番頭が戦地から戻らず、すぐに商売を再開できる状況にありませんでした。先にあげた大嶽萬三郎商店も、商売を完全に復活させたのは昭和24年頃のことでした。また、戦後に掛けられた財産税により、資産のあつた大店は大きく痛手を受けたといいます。

たまたま戦後に掛けられた賄産税により資産のあつた大店は大きく痛手を受けたといいます。

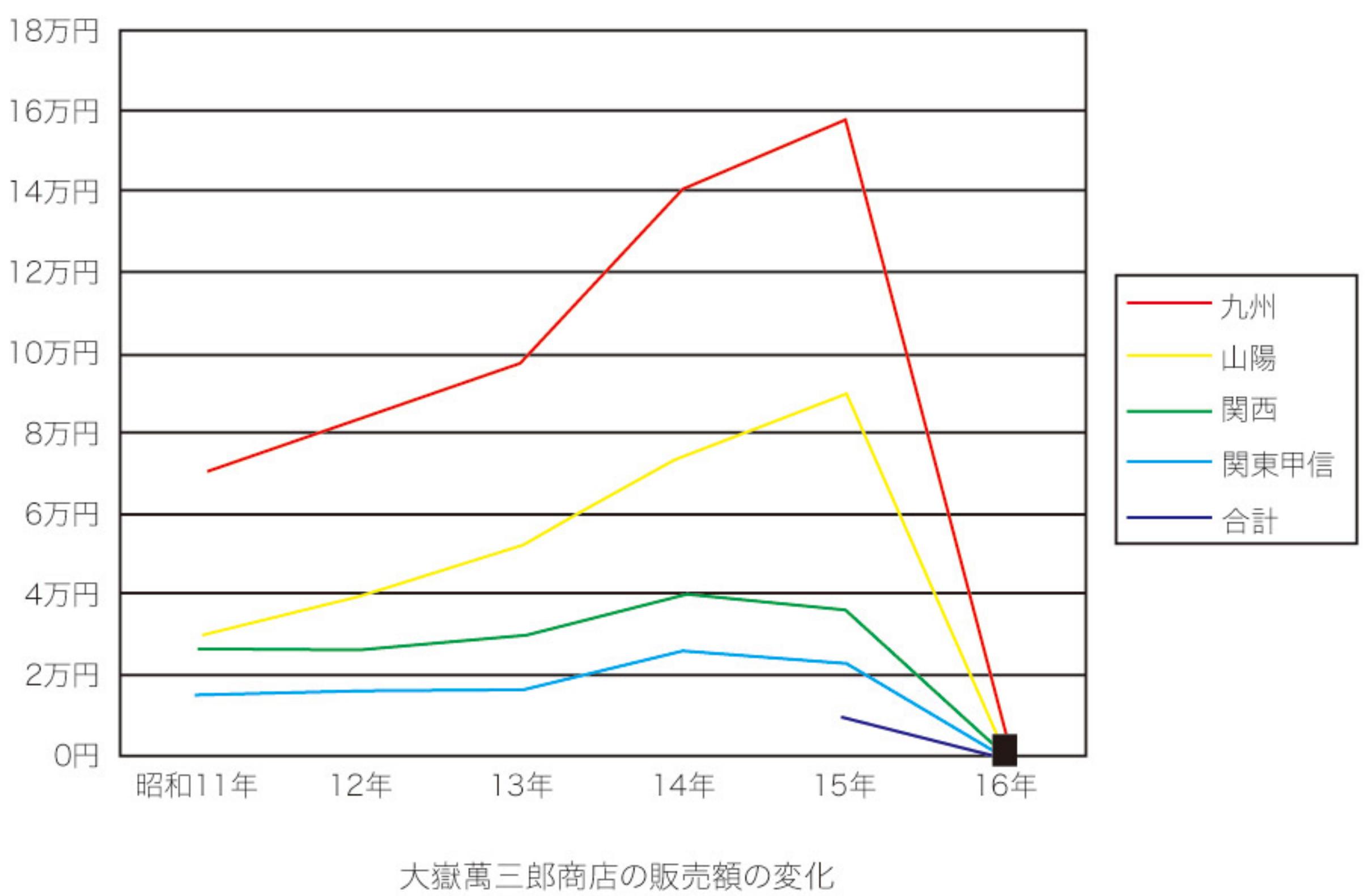
そんな中で、終戦直後から個人経営の新興商人が現れ、美濃焼の販売を担つていきました。前畠の故坂崎重雄会長もそのうちの一人でした。生前、平成26年6月にお話を伺つた際、終戦直後の思い出を語つてくださいました。

戦前に多治見市豊岡町の陶器商で修業をしていた重雄氏は、昭和18年に出征し、昭和21年3月に香港から復員します。帰国してすぐに奥川町に倉庫を借り、顔見知りの窯屋をまわり、戦時に売れ残った商品を仕入れて北海道へ貨車で送りました。物資の不足していた北海道では、仕入れの2倍の値段で商品が売れたといい、荷解きするところを客が待っているほどだつたといいます。北海道への旅の帰りには、青森でスルメやリンゴを購入して帰り、窯屋の奥さんへ持っていくと喜ばれ、商品を融通してもらえたそうです。このようなやり方で商売を拡大していく、戦後の美濃焼業界の中核を担うまでになりました。

戦後は多くの新興商人が急成長を遂げ、多治見商人も、本町通りを賑わした戦前とは大きく様変わりしていきました。

出動者	續柄關係	出動年月日	部隊名
横田史郎	加藤松治郎店員	現役，八月廿二日	儘腐森部隊
水野敏雄	同上	昭和十二年八月廿二日	水谷部隊
加藤千一	同上	八月廿日	步六八第二機歸銃隊
小林忠文	滿留肥店員	同月十七日	山田部隊
古林英介	長治三男	同月十七日	鷹森部隊
加藤市夫	山力陶器店店員	同月廿日	同
今井國男	同上	同月廿七日	同隊
本田實	日比野新七店員	同月廿七日	同隊
加藤良雄	貫一三男	八月廿日	同隊
有賀敏雄	大嶽萬三郎店員	現役，八月廿日	儘吳軍艦球磨
小栗猛	同上	八月廿日	步六八補充隊

美濃西部陶磁器商業組合の組合員および 店員の出征記録 昭和12年



博覧会への出品

明治時代以降、政府は殖産興業を図る一環として、陶磁器産業の振興にも積極的な姿勢をとります。明治時代の美濃でも、有田や九谷に続くべく加藤五輔や西浦圓治が万国博覧会に出品、入賞しながら美濃焼の評価を高め、輸出を増やしていきました。国内でも、各地での勧業博覧会に美濃焼が出品されています。大量生産される安価なやきものというイメージが美濃焼につきまとう中で、良質の、しかも美術品のレベルにまで質を高めた魅力が広く消費者層に訴えかけられたことは、今でいうところの美濃焼のブランディングとして多大な効果を上げました。戦後も産業と文化の復興のために、昭和23年（1948）から25年（1950）にかけて全国の都市で博覧会が相次いで開催され、宣伝の好機として美濃焼が各博覧会に出品されています。

見本市でアピール

こうした博覧会だけでなく、昭和10年（1935）に岐阜県陶磁器試験場内に設置された中間工場が試作品を相当数複製し、一般市場での販売を通じた商品化の検証を行いました。関西や東京の百貨店で販売すると同時に、地元の期待に応えるかたちで場内開放の即売会を年中行事とし、商取引を通じた販売知識やコスト意識などを職員に体得させて、美濃焼の質の向上とイメージアップに努めます。戦後には美濃焼の卸商や商社が中心となつて、販路の拡張と消費者への宣伝が盛んとなりました。終戦から2年後の昭和22年（1947）には、早くも「輸出向磁器上絵見本展覽会」が開かれます。昭和24年（1949）には、東京に「美濃焼やきもの展示所」も開設されました。また、同28年（1953）、多治見卸商業組合などが地元で美濃焼の見本市を開いて全国から業者を集め、たった1日で2,000万円以上もの商談が成立したそうです。翌年にも同様の催しが開かれ、なんどならないほど、頻繁に開催されていました。

2万点の陶磁器見本が展示されました。さらに初めての試みとして、東京の高島屋において、岐阜県主催の「美濃新作陶芸展」が催され、6日間の会期中に訪れた観覧者は延べ4万人以上を数えたといいます。昭和34年（1959）からは品質の向上を図るとともに新作の奨励を目的に、岐阜県陶磁器工業協同組合連合会が「岐阜県陶磁器新作展示会」を始め、新作と同年度における考案権登録品を展示して優秀なものを表彰し、各組合でも巡回展が行われました。翌年の第2回には、土岐市の陶磁器試験場や多治見市の意匠研究所の賛助出品を通じ、研究・教育機関との連携も図られるようになります。当時の消費地における見本市は不当廉売の障害をも生じているとして、岐阜県陶磁器工業協同組合連合会が38年（1963）に見本市対策委員会を設置し、参加を承認制とし会場を査察するなどの措置を講じなければならぬほど、頻繁に開催されていました。

美濃焼まつり（多治見陶器まつり）

また、美濃焼の陶祖を祀る平野公園での陶祖祭が「美濃焼まつり」と発展し、祭典のほかに陶磁器の廉売市が行われて多治見の春の一大イベントとなり定着しました。昭和53年（1978）には美濃焼団地のイベントも加わり、秋の廉売市として、こちらも全国から大勢の買い物客を集めています。

一方で、美濃焼の振興と国際交流を目的とした国際陶磁器フェスティバルが、昭和61年（1986）に多治見市で開催されました。そのメインイベントである、陶磁器産業デザイン部門と陶芸部門からなる国際コンペティションには47ヶ国から5,600点余りの応募があり、世界中に「MINO」の名を知らしめるのに大いに貢献しています。優れたデザインと作品が集合した入賞・入選作品の展示は、陶磁器に対する人々の既成概念を覆しながら、平成26年（2014）には第10回を迎えるました。



昭和34年国際見本市（多治見市図書館提供）

<参考文献>

岐陶工道50年史編集委員会 編 1982『美濃陶業50年史』

多治見市 編 1987『多治見市史』通史編 下

多治見商工会議所 編 1997『多治見都市考』

岐阜県セラミックス研究所 編 2011『岐阜県陶磁器試験場の100年』図録

多治見陶磁器卸商業協同組合

「多治見陶器まつり」へ

多陶商が中心となり毎年4月におこなわれる陶器祭はたくさんの買い物客で賑わい、当地方の一大イベントして全国に知られています。4月の陶祖祭にあわせた陶器廉売市は昭和23年(1948)に開催された「美濃焼まつり」が始まりです。

当時は本町通り、小路町、新町だけでなく、豊岡町や宮前町でも市を開いていました。以降「茶わんまつり」「たじみ陶器まつり」など名称や開催場所を変えながら現在に至ります。

美濃陶祖魂

陶祖祭は美濃焼産地の各地域で行われ、それぞれが特色ある祭りを開催しています。いずれも各産地の陶祖碑前で行われる神事(または仏事)が祭りの中心的な行事となっていますが、市内に数ある陶祖碑の中でも平野公園の「美濃陶祖碑」は最も早く明治20年代に建碑計画が持ち上がりました。

明治23年(1890)2月19日の『愛知新報』には

「美濃陶器、俗に多治見焼という陶器」として美濃焼の来歴が記され、「美濃陶器元祖加藤与三兵衛及び、古窯建築人加藤筑後守並に、多治見町祖先加藤景増らのため記念碑を建築」しようと「加藤貫一、同庄六、同鈴九郎、同徳兵衛そのほかの諸氏はしきりに奔走尽力中」であると書かれています。

(『陶器商便覧』より)

明治23年には当時の有力な陶器商らが中心となつて陶祖碑建碑を目論んでいたことがわかります。

明治34年(1901)に同業者組合設立の法令によりこの地域でも同年に各地の製陶業者を一つに結集させようと「美濃陶磁器同業組合」が設立され、それを期に陶祖碑の建碑計画も本格化されました。同年5月には開通間もない中央線によって高さ3・5mの仙台産の碑石が輸送され、多治見駅から平野公園までは台車で、公園までの金刀比羅(こんぴら)坂は養正小学校の児童も加わって大勢の人によつて引つ張り上げられました。明治39年(1906)11月に行われた建碑式には、餅投げ・花火・芸妓の踊りなどの行事が催され、町中が祝賀に沸きました。陶祖碑のまわりにはこの年に送電され始めたばかりの電灯がはりめぐらされ、池田や小泉からもその灯りを見ることができたといいます。

美濃陶祖碑は、幕末に五稜郭で新政府に抗し明治維新後は諸大臣を歴任した榎本武揚が題字を書し、仙台藩士で幕末・明治を代表する漢学者であつた岡千仞が撰文、明治の二大書道家とうたわれた西川元讓が書を担当しました。これらの超一流の人たちがかかわった経緯は伝わつていませんが、当時の美濃陶業人の盛んな意気込みが伝わってきます。



平野公園にある美濃陶祖碑

<参考文献>

「多治見市史通史編下」(多治見市1987年)
「明治24年『陶器商便覧』」(横浜市図書館所蔵)
写真はいずれも多治見市図書館郷土資料室所蔵

多治見陶磁器卸商業協同組合



昭和32年(1957)の陶器廉売市(小路町)

多治見陶磁器卸商業協同組合

昭和7年、多治見陶磁器卸商業協同組合創立。昭和9年、商業組合としての認可を受ける。以降、組合活動はその主旨のもとに順調な運営・発展がつづくはずであったが、当時の時代背景・社会情勢はそれを許さなかつた。

特に昭和15年を境にして状況は一変したといえるだろう。すでに中国大陸へ力づくで進出していいた日本は、ドロ沼のような戦争を続けており、国内でもその影響は経済活動や日常生活に暗い影をおとしあげていた。

昭和15年から昭和20年、終戦を迎えるまでは数年間というものの、太平洋戦争を原因とした極端な耐乏生活を強いられた時代であった。

多治見における陶磁器産業にもさまざまな問題がふりかかってきた。国による統制経済政策は企業整備、製品価格統制などの具体的な規制により自由経済に基づく生産・販売活動はほぼ無きに等しいものであった。

企業整備命令が下る

経済活動は軍需生産一辺倒と変わり、陶磁器産業に携わる地元の人々にも40歳以下は軍需工場へ、という動員命令が下される。これは事実上、転廻業を余儀なくするものであり、大多数の人々には死活問題であった。こうした状況の中で、組合においても大論争が起き、重大な争議へと発展していった。しかし、この大きな問題は解決の道もなく、陶磁器業界全体の企業整備へ、そして組合も組合改組を行わざるを得ず、必然的に組合員の足切りという非常手段に移つた。その結果、改組前三百数十であった組合員が、六十数人にまで激減することとなつた。

当組合にとっては、いかに時代がそうであつたとはいえ可酷な試練の時期であつたといえよう。

藁(わら)の統制

今でこそ商品発送時の梱包に藁を用いないようになったが、ほんの数年前までは藁は商品梱包のために重要な資材のひとつとなっていた。当時の統制は、この藁にも及び大きな痛手を組合活動に与えることとなつた。

昭和15年に行われた藁の統制によつて、思うように藁が手に入れず、藁の確保のために奔走するという時期があつた。地元の農家へ行けば藁はいくらでもある、なのに何故奔走までして確保するという皮肉な出来事が起きたのか。

当時藁の価格は一貫目7銭という統制価格が定められ、これが藁入手のためのネックとなつたのである。運搬費を含めると一貫目7銭では買えない。しかし、生産活動・販売活動をつづけていく上で藁は必要不可欠であつた。必要悪を承知で高い価格で藁を買い集める。しかし、これが統制違反として摘発を受けることになつたのである。

当時は藁共同倉庫を運営していた程であるから、その重要性が分らうというものである。抜け道として、藁の産地まで行つて現地で買付けるという方法を取つた。その運搬には大八車が用いられた。今日の生活からは想像もつかないだろうが、大変な労力を要することであつた。しかし、これも買い出し人足の不足などもあつて、思うに任せない状態であつた。そこで運搬手段にて鉄道の利用を思いついた。そこで近県を廻つて買い集めようとするが、ことごとく断られる。やがて藁を求めて遠く東北の宮城県・仙台まで買い出しに出かけていくことになつた。たかが藁のために東北まで、笑い話しのようである。しかし当時は鉄道運賃が安く、それだからこそできた苦肉の策といえるかもしれない。

戦争という非常事態の時代とはいえ、こんな苦労が続けていた。しかし、昭和15年の企業合同の動きの中にもう一つ、満洲や朝鮮貿易を行つていた業者は、そんな時代にあっても大きく伸びていつた。



組合陣列棚



昭和9年 新装なった組合事務所

新装なった組合事務所(昭和9年)

戦後・高度成長時代へ

戦後から昭和30年代の終りまでの主な出来事を列記してみよう。

・昭和22年 片山内閣の時代である。お金はあつてもモノがない、当時は戦後インフレの初期であった。この頃、政府による新価格体制づくりの動きが出ていた。

・昭和24年 この年、為替レートが1ドル360円と決定する。統制価格もこの頃から順次解除され、徳利などが自由価格となる。組合自体が組織としての形を整えてくるのは、この頃からである。

・昭和25年 この年、朝鮮戦争が起き、戦争特需により国内経済は一時的に大きく向上する。

・昭和28年 この頃まで組合イン一百数十名いたのが、次第に転職などで抜け、およそ3分の2程に減る。この年、第一回目の商業組合の出資証券を発行。同じく第一回目の商業組合の見本市が、この地で開催される。

・昭和30年 業界はすでに生産過剰気味の傾向を見せはじめており、売りさばくのがだんだん難しくなってきた。

・昭和33年 組合事業の大きな柱となっている給油スタンドの経営は、この年6代目理事長吉田桑吉の力説によつて始められる。さらに、組合事業として資材の共同仕入れ、共同販売や組合員に対する金融事業も次々と行われるようになつた。

このような過程を経て混乱の中にあるながら、日本経済を復興・発展と歩みを揃えて組合活動も徐々に活発になり、規模内容が充実してきたのである。

転換の時代

やがて時代は大きな転換期を迎えることになる。昭和20年代の後半から昭和30年代へと利行する中で、朝鮮戦争による特需景気、神武景気、岩戸景気という経済の大きな波を乗り越えながら、日本全体は復興から成長・発展へと向かつていった。

多治見の陶磁器産業の構造自体にも大きな転換時期であったといえよう。製造分野と商業分野との立場逆転がそれである。戦時中は戦争の為の物資づくりに回っていた生産設備等は徐々に生活物資づくりへと向けられた。そして、国の方針も生産能力を大幅に向上させる手段として低金利の融資等手厚い政策を揚げ、積極的に援助をしていく。焼き物は比較的手軽にできるということもあり、立ち直りも早かつたと言えよう。

一方、商業分野においては国の積極的な援助が得られず、結局はメーカーのセールス的な立場で甘んじるということになってしまった。戦前までの商業側がイニシアチブを握っていた状況が、ここで大きく逆転してしまつたのである。

この立場の逆転は、若者の意識にも顕著に見られた。

戦前は誰もが商人を見ざし、羽ぶりをきかせていたが、戦後立場が逆転するにつれて、メーカー志向へと変わってしまったのである。



当時の多治見警察署



陶磁器の統制価格表

当時の陶磁器試験場

昭和34年の全国陶磁器商業組合の多くは昭和初期もしくは戦後の設立だった。



昭和34年
全国陶磁器商業組合
主要都市版

26cm
(横)

陶業時報社

多治見商人が活躍するためには品質向上と技術の革新が不可欠だ。
自信と誇りを持って日本中、世界へ美濃焼を広めた技の歴史を振返る。

歴史

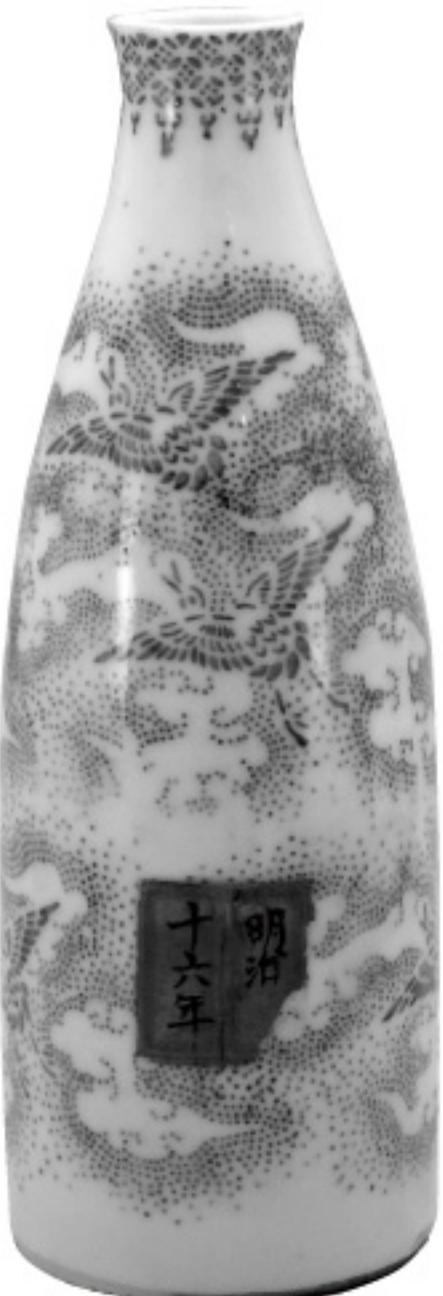


博物館 多治見商人物語

陶都創造館3Fで陶器商人の足跡を紹介する取組を開始。



明治の技②



摺絵の技法を用いたものである。文様を切り抜いた型紙の使用によって、手描きに代わる効率的な絵付け方法となつた。多治見市史によれば、「明治15年(1882)のころ、脇之島の上田幸右衛門は伊勢白子から型紙職人長谷川久之助ら三人を招いて型紙をつくらせた」とされ、その始まりの時期と製作年がおおむね符合している。この技法は、陶磁器に関する国内需要の高まりに伴つて導入されたものであり、量産体制を確立していくよ。

摺絵による雲鶴の文様をつぶさにみると大変緻密に施されていて、量産のための技法とは言え一切の手抜きは見られない。なお、89点の資料中に摺絵製品は、他にも明治19年、同28年、同44年の3点が存在し、次に記す銅版転写の導入以降は急速に衰退していくとの指摘もあるが、実際には併存していたことがうかがわれる。また、後年に至るほど粗雑なものとなつていく傾向も見受けられる。

摺絵による雲鶴の文様をつぶさにみると大変緻密に施されていて、量産のための技法とは言え一切の手抜きは見られない。なお、89点の資料中に摺絵製品は、他にも明治19年、同28年、同44年の3点が存在し、次に記す銅版転写の導入以降は急速に衰退していくとの指摘もあるが、実際には併存していたことがうかがわれる。また、後年に至るほど粗雑なものとなつていく傾向も見受けられる。

摺絵による雲鶴の文様をつぶさにみると大変緻密に施されていて、量産のための技法とは言え一切の手抜きは見られない。なお、89点の資料中に摺絵製品は、他にも明治19年、同28年、同44年の3点が存在し、次に記す銅版転写の導入以降は急速に衰退していくとの指摘もあるが、実際には併存していたことがうかがわれる。また、後年に至るほど粗雑なものとなつていく傾向も見受けられる。

摺絵による雲鶴の文様をつぶさにみると大変緻密に施されていて、量産のための技法とは言え一切の手抜きは見られない。なお、89点の資料中に摺絵製品は、他にも明治19年、同28年、同44年の3点が存在し、次に記す銅版転写の導入以降は急速に衰退していくとの指摘もあるが、実際には併存していたことがうかがわれる。また、後年に至るほど粗雑なものとなつていく傾向も見受けられる。

明治の技①

古い陶磁器の製作年代を正確に知ることは難しい。考古学的な手法や、文献などの記述によって探ることはできても、1年単位で示すことは、ほぼ不可能である。ただし稀に、作られた年がズバリ製品に記されているものが存在する。正確な年が解れば、そこに使われている技法や「デザイン」の使用時期もつぶさに確認できる。さらには、似たような陶磁器のおおよその製作年なども芋づる式に推定できるなど、非常に貴重な情報源となりうるのである。

このような可能性を秘めた陶磁器に関して、89点もの明治時代に作られた美濃焼が、多治見工業高等学校的資料の中に存在している。製作年を記したラベルがそれに貼られており、もともと、明治38年(1905)に当時の宮内省の役人が加藤助三郎のもとへ来店した際に、美濃焼の概要を説明するために用いたものようである。そのうち、多治見工業高等学校へ寄贈され現在にいたっている。

製作年が一定期間内で明確となつている陶磁器群の存在は、国内の他産地を見渡しても例がなく、極めて貴重といえる。これらの資料の中から主要なものを選び出し、從来から知られている文献資料等と照合しつつ、明治期における美濃焼の技術・技法について時代を追つて紹介する。

美濃で磁器が焼成できるようになったのは、江戸時代の文化・文政年間(1804～29)頃であり、その後流れを汲むように、いまだ黒味を帶びた山呂須による手描きの絵付けが施されている。

1 染付雲氣文奈良茶碗 明治元年

添付資料のラベル年号



2 染付蝙蝠文煎茶碗 明治8年

1875年



3 青磁花籠文小皿 明治10年

添付資料のラベル年号



伝統的な青磁ではなく、安定した黄緑を発色するクロム青磁と呼ばれるものが施されている。これまで、美濃におけるクロム青磁の導入時期は特に触れられてこなかつたが、明治10年には使用されていたことが確かめられた。

薄手のカップであり、明治17年(1884)に土岐市妻木の水野勘兵衛が伏せ焼きによる薄手の白磁カップを完成したことが知られていて、相互の関連も考えられる。その後の妻木は、カップの生産で名を馳せていった。岐阜県立多治見工業高等学校には1,500点を超える近代の陶磁器資料が所蔵されている。その中に、他の資料群が存在。これらを通じて美濃焼技術の変遷がわかる。

4 白磁力ツブ

明治15年

1882年



5 摺絵染付雲鶴文徳利 明治16年

1883年

1883年

6 銅版染付花鳥図小皿 明治21年

1888年

1888年



7 銅版染付花鳥図小皿

7 銅版染付花鳥図小皿 明治21年

1888年

1888年



6 銅版染付小皿

大正・昭和の技

国内最大の生産量を誇る美濃焼について、明治時代に絵付けの分野でその製造を支えた摺絵や銅版転写、石版転写などに続き、大正から昭和にかけては更なる技法が開発されていった。そして消長を繰り返しながら、各種の方法によつて美濃焼を彩り続けている。

ゴム版絵付けは、ゴムスタンプを用いて簡単に絵付けするものであり、大正7、8年（1918、19）頃より登場した。すでにこの技法については、明治時代にヨーロッパから国内に伝えられたものの、曲面の多い器に絵付けするのは困難であり、普及することはなかつた。その後、これを解消するために図柄が施されたゴムの部分と、握り手との間に分厚いスポンジを使用することが考えられ（写真）、ようやく実用化にたどり着いた。

すでに開発されていた銅版転写のような繊細さや、石版転写のような写実性には劣つたものの、製版が安価にできて小ぶりな文様に適し、絵付けの工程も非常に簡素なことから広く普及していくこととなつた。下絵付、上絵付とともに使用することができたが、後に記すスクリーン印刷の開発によって衰退する。スタンプのように押すことから、「ポン押し」とも呼ばれていた。

スクリーン印刷は細かな網目状のスクリーン（ナイロン、テトロンなど）に白く残したい部分を止めして、絵具を通過させることで図

柄として印刷（孔版）する。当初、スクリーンに絹布が使用されていたことから、シルクスクリーンとも呼ばれていた。捺染の技術をヒントとして明治38年（1905）にイギリスで考案されたといわれ、陶磁器に限らず様々な分野で使用されている。美濃焼の絵付けへの応用に着目したのは多治見市陶磁器意匠研究所であり、研究の末、昭和37年に実用化にこぎつけた。そして、写真製版やグラデーションの表現、自動印刷機の開発などによって、今日でも美濃焼における上絵付の主要な絵付け法となっている。

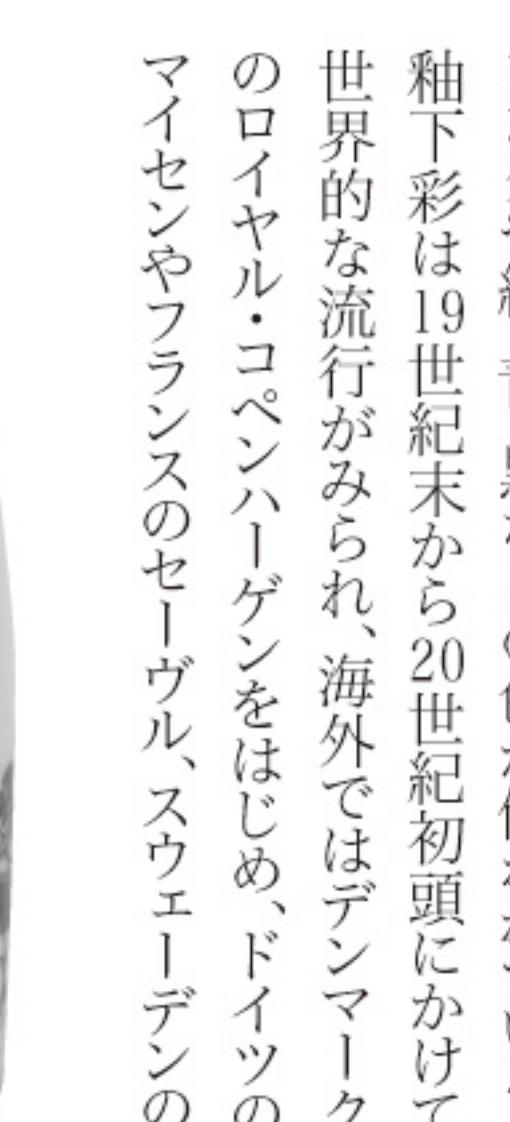
明治時代以降、さまざまな量産のための絵付け法が開発・導入され、ニーズに応じて美濃焼を色とりどりに着飾ってきた。成形や焼成、さらにはデザインの改良なども並行して行われており、これらの下支えがあつて、今日ある美濃焼産地が形成されてきたのである。

明治の技③



9 赤絵銅版花筏文小皿 明治28年
1895年

上絵付に銅版転写を応用したものである。下絵付の銅版転写については前号で記したとおりであり、その後、多治見の加藤小三郎が製版や印刷、転写の方法に工夫を凝らして明治28年（1895）に改めて上絵付に



10 粟下彩東下り図徳利 明治33年
1900年

釉下彩とは文字通り透明釉の下に多色の絵付けが施されたものであり、この徳利にはピンクや緑、青、黒などの色が使われている。釉下彩は19世紀末から20世紀初頭にかけて世界的な流行がみられ、海外ではデンマークのロイヤル・コペンハーゲンをはじめ、ドイツのマイセンやフランスのセーヴル、スウェーデンの



11 石版赤絵人物図小皿 明治34年
1901年

辰砂とは、酸化銅を呈色剤に用いて還元焼成することにより赤く発色させるもので、中国の北宋時代から作り続けられている。ちょうどこの徳利の製作年と同時期の19世纪末、フランスのエルネスト・シャブレが中国陶磁の影響を受けて辰砂を焼成していた。国内でも東京の竹本隼太が手掛けるなど洋の東西を問わず注目される存在となり、このような流れの中で本製作が試みられたのではないかと考えられる。これまでみてきた絵付け技法の進展を示すものとは異なるが、實に興味深い。

より技術として完成させた。絵付け部分の脇に「多東舎」と記された小三郎の窯の屋号がみられるのことから、同氏が手掛けたものであることは明らかであり、製作年と技法の完成時期がピタリと重なっている。優雅な絵付けが施されており、量産のためとして汎用されることとなつた。



薄石版という石灰石の平板を使った平版印刷であり、それまでの銅版による凹版印刷とは全く異なる。緻密な表現に秀でており、女性の肖像が白黒写真のようく浮かび上がつており、初期の状況を示す貴重なものといえる。

ロールストランドなどの作品を飾った。国内でも東京や横浜、美濃、瀬戸、有田の著名な窯では世界と拮抗した状況にあり、美濃では、西浦焼で知られる西浦圓治の釉下彩作品が有名である。このようなグローバルな流れを背景として、この徳利はつくられた。



昭和50年代初めには下絵パッド印刷が開発された。この技法は、凹版に刷り込んだ吳須をウレタン質の転写体（タコ）に付着させ、それを直接素焼きの器面に押し付けて印刷する。広範囲にわたる印刷には適さないが、弾力のあるパッドを使用しているため曲面への印刷も可能であり、手描き特有の「ダミ」などの表現にも優れている。また、ベルトコンベアシステムによつて、自動的に絵付けができるようになつた。「タコ印刷」とも呼ばれ、陶磁器以外にも様々な分野で応用されている。

8 辰砂徳利

明治26年
1893年

「辰砂徳利」と記された小三郎の窯の屋号がみられることから、同氏が手掛けたものであることは明らかであり、製作年と技法の完成時

期がピタリと重なっている。優雅な絵付けが施されており、量産のためとして汎用されることとなつた。

炻器（せつき）というのは、英語の

Stone ware の日本語訳。透光性

がなく、磁器と陶器の中間的な性質で、日

本では素地に鉄分を多く含むものを指す。

大正時代末期の不況のなか、美濃で大量に

産出しながら廃棄されていた、含鉄黄土の

利用が検討された。また、連房式登り窯か

ら石炭窯への急速な転換期にあり、美濃焼

の商品価格が下がるなかで燃料の節約が求

められた。駄知の陶器商・加藤宮蔵（みやぞ

う）ら「駄知五人衆」は東京工業試験所の熊

沢次郎吉の助力を得て、その製品化に成

功。彼らは昭和2年（1927）設立の会社

名に新元号の「昭和」を冠し、生産を始め

た。岐阜県陶磁器試験場でも、「火度を低く

して比較的実用的な陶磁器を製造すべき

素地を研究すること」を改良事項に掲げる

井深捨吉場長の考えで、昭和8年（1933）

に滝呂の黄土を焼いたところ、焼成火度が

低く燃料の節約ができることがわかった。

素地が緻密で自由な加飾も可能だつたた

め、井深は工芸的に独特の黄色い色調を活

かせば、国内向けにも輸出向けにも、趣の新

しい製品として販路を拡張できると確信。

試験場はこれを、「精炻器」と命名した。

試験場技手の加藤士師萌（はじめ）が精

炻器の作品や見本を制作し、場内外の指導

にあたった。宮蔵が代表の昭和製陶会社を

何度も訪れ、指導した。試験場は土や原料

の調合を公表しない代わりに、適格な業者

には原料や釉薬を供給し、指導も行つて育

昭和の技——精炻器（せいせつき）

直ちに粗悪品である「先入観を拭い去り、信

用度も増す」というブランディングをも考え

ていた。結果、エコでモダンな精炻器は人気

を得ていき、現・ノリタケの日本陶器株式会

社を通じて米国から受注があつたが、日米

開戦によつて本格的な輸出には至らなかつ

た。



▲戦時中の精炻器湯呑（美濃焼ミュージアム所蔵）

戦時中の統制のなか、精炻器の生産が広まる。戦後は炻器が磁器よりも関税が低く、フォーマルな磁器からカジュアルなものへの志向の変化もあって、対米輸出が増えていく。昭和製陶と並び、生田の日本窯業も数多く生産。また、炻器質の徳利の産地・高

加飾を重ねて手間のかかる精炻器は、昭和30年代をピークに輸出以外の国内向けが姿を消した。しかし、平成12年（2000）に美濃焼の技術や技法の単調化に対する危機感から、試験場の後身・セラミックス技術研究所の協力で精炻器研究会が発足、陶芸家たちが新しい感性での精炻器制作に取り組んでいる。



▲戦時中の精炻器コーヒー碗皿（美濃焼ミュージアム所蔵）

昭和からの多治見商人 ———【多治見陶器卸商業組合】

以下、只今製作準備中

